

羽咋市吉崎・次場遺跡

— 第3次発掘調査概報 —

1976 3

羽 咲 市 教 育 委 員 会

## 例　　言

1 本報告は国、県の補助事業として昭和50年7月20日より10月10日の期間にわたって、羽咋市教育委員会が実施した羽咋市吉崎町次場遺跡の範囲確認調査の概報である。

### 2 発掘調査団組織

調査委員長	野口定雄（市教育長）
調査副委員長	酒井正善（市文化財保護課委員長）
調査団長	浜岡賢太郎（石川考古学研究会代表幹事）
調査主任	橋本澄夫（石川考古学研究会幹事）
調査員	吉岡康暢（　〃　〃　）
〃	市掘藤夫（　〃　〃　）
〃	中条茂雄（　〃　〃　）
〃	谷内尾晋司（　〃　〃　）
〃	中越照次（　〃　会員）
〃	高野太一郎（　〃　〃　）
〃	盛田義徳（　〃　〃　）
〃	西野秀和（　〃　〃　）
〃	宮岸久司（　〃　〃　）
〃	浅野幸雄（　〃　〃　）
〃	岩田捨男（　〃　〃　）
〃	三浦純夫（　〃　〃　）
調査事務局	三宅善文（市社会教育課長）
調査協力	吉崎町有志（町長　徳和利美）
	次場町有志（町長　渡辺市之丞）
	立正大学学生（田嶋正和他7名）
	県立羽咋高校地歴クラブ

- 3 本書の執筆、編集は浜岡賢太郎・谷内尾晋司・三浦純夫が行った。  
4 本発掘調査の本報告書は後日刊行予定である。

## 1 まえがき

次場遺跡は旧邑知潟の湖脚から西流する羽咋川が旧羽咋町の砂丘に達する1kmほどの、東側の低湿地帯に旧志雄川によって形成された自然堤防上に集落を営んだ石川県に於ける農耕文化黎明期に始まる大遺跡である。昭和27年羽咋川改修工事の際、夥しい土器、田舟の出土で世の注目を浴び、石川考古学研究会、羽咋高校をはじめ県内高校地歴クラブにより昭和30年3月、昭和38年8月の二度にわたる発掘調査が行なわれた。その結果、仿製内行花文鏡をはじめとする豊富な土器、石器、木製品、自然遺物が得られた。土器は「次場上層式土器」、「同下層式土器」「同最下層式土器」に整理され、北陸地方弥生式土器中・後期の標準形式名として用いられるに至り、昭和49年3月発行の「石川県遺跡地図」に記載すると共に、文化庁により重要遺跡に指定されているのである。

羽咋砂丘には羽咋国造墓の伝説をもつ大塚古墳、大谷塚古墳を盟主墳とする羽咋古墳群、北方柳田には山伏穴古墳、宮の山古墳を盟主墳とする柳田古墳群を遠望できる。又砂丘の内列には旧羽咋高校前遺跡をはじめ、長者川、農業倉庫前、釜屋、新保、猫ノ目、一ノ宮郵便局、柳田シャコテ台地、柳田上野の弥生から古墳時代前期に亘る各遺跡が前面に拡がる低湿地を生産の場として並んで営まれている。滝、柴垣の岩石海岸地帯と邑知潟湖脚低湿地と志雄川沖積低地に能登國とならぶ羽咋国が形成されたわけであるが、次場遺跡はその発祥地とも言いうるものである。

過去2回の発掘調査の結果、釜屋橋から次場部落に至る農道の北側の畑地に遺跡の中心が存在するものと考えてきたが、畑地以外の水田面は全然調査しなかったので遺跡の全容を把握ことができなかつたのである。

昭和49年羽咋市に於て、腐朽した釜屋橋の架替と共に都市計画路線として、この農道の拡幅が計画された。そのため、拡幅部分に重要な遺構が存在していないか、又道路が建設整備されたあと遺跡が市街化等により壊滅しないかの心配が生じたのである。

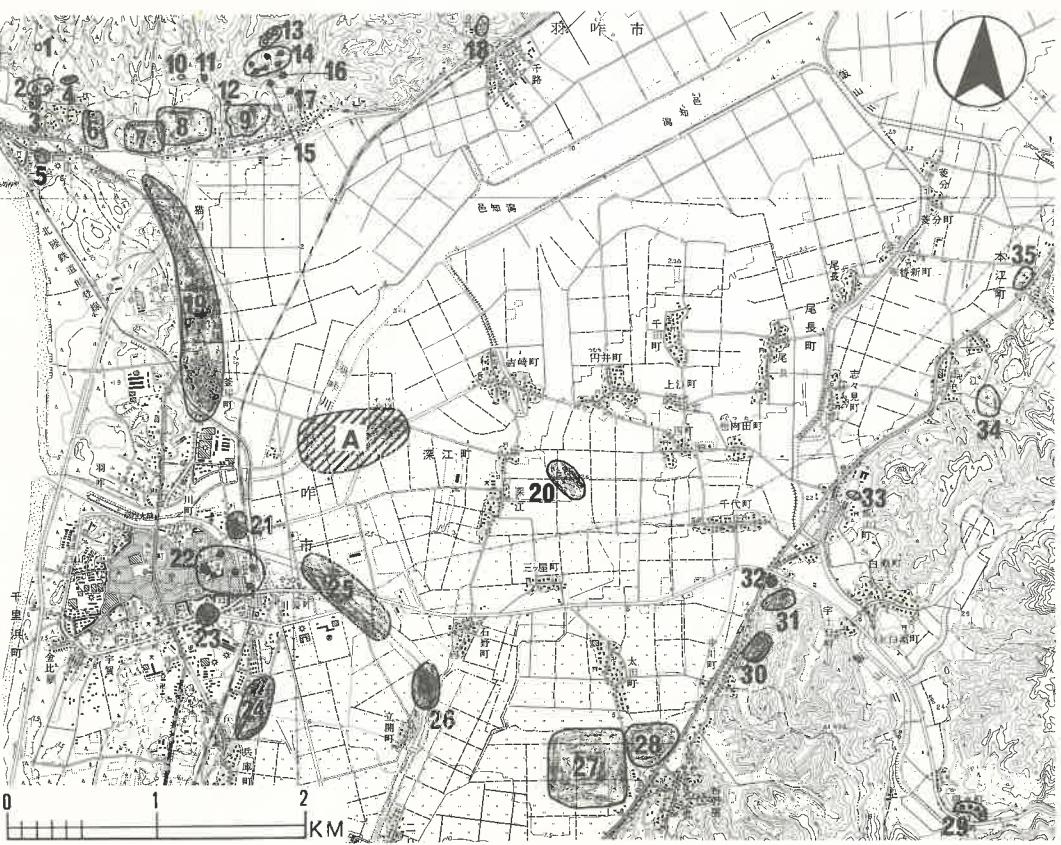
重要遺跡として、その分布状態を的確に把握し、保存の体制を早急に立てること、道路拡幅計画の変更の要ありや否やの2点を考え、



調査風景 1

文化庁、石川県教育委員会、羽咋市教育委員会により分布調査が計画、実施されるに至ったのである。今回は道路の両側をはじめ、畑地全域と北側水田部分を調査し、遺跡の北および東限の確認を主目的としたのである。

〈浜岡 賢太郎〉



第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺 跡 名	所 在 地	時 代	内 容	No.	遺 跡 名	所 在 地	時 代	内 容
1	一ノ宮左弥遺跡	羽咋市 一ノ宮町	繩 文	包含地	19	釜屋・新保・猫ノ目 遺跡	羽咋市釜屋町	弥 生	包含地
2	氣多1号～2号墳	" 寺家町	古 墳	古 墓	20	深 江 遺 跡	" 深江町	奈良～平安	集落跡 集落跡
3	若 宮 屋 敷	" "	不 詳	社 跡	21	農業倉庫前遺跡	" 的場町	弥 生	包含地
4	寺 家 中 世 墓	" "	"	墳 墓	22	羽 咲 古 墓 群	" 川原町	古 墓	古 墓
5	一ノ宮郵便局遺跡	" 一ノ宮町	弥 生	包含地	23	羽 咲 高 校 前 遺 跡	" 旭 町	弥 生	包含地
6	寺 家 遺 跡	" 寺家町	不 詳	"	24	長 者 川 遺 跡	" 兵庫町	繩文・弥生 古墳・平安	"
7	柳 田 し ゃ こ で 廃 寺	" 柳田町	奈 良	寺 跡	25	子 浦 川 遺 跡	" 羽 咲 町	弥 生	"
8	柳 田 台 地 遺 跡	" "	古 墳	包含地	26	子 浦 川 南 遺 跡	" 立開町	古 墓	"
9	柳 田 う わ の 遺 跡	" "	弥 生	集落跡	27	ろくばわり遺跡	" 羽 咲 郡 志 雄 町 杉 野 屋	弥 生 奈 良～平安 中 世	集落跡
10	柳 田 テンジク 1 号 窯	" "	古 墳	窯 跡	28	杉 野 屋 遺 跡	" "	古 墓	包含地
11	柳 田 テンジク 古 墳	" "	"	古 墓	29	福 水 円 山 1 号 ～ 4 号 墳	羽 咲 市 福 水 町	古 墓	古 墓
12	セックデン古墳	" "	"	"	30	中 川 中 世 寺 院 跡	" 中 川 町	中 世	寺 院 跡
13	柳 田 五 郎 兵 衛 山 1 号 窯 ～ 3 号 窯	" "	"	窯 跡	31	中 川 遺 跡	" "	繩 文	包含地
14	柳 田 う わ の 1 号 ～ 6 号 墳	" "	古 墓	"	32	飯 山 戰 場 ガ 端 遺 跡	" 飯 山 町	平 安	"
15	山 伏 山 1 号 墳	" "	"	"	33	飯 山 小 学 校 1 号 ～ 3 号 横 穴	" "	古 墓	古 墓
16	山 伏 山 2 号 墳	" "	"	"	34	本 江 遺 跡	" 本 江 町	繩 文・古 墓	包含地
17	宮 の 山 古 墳	" "	"	"	35	若 部 遺 跡	" 若 部 町	平 安・中 世	"
18	千 路 遺 跡	" 千 路 町	繩 文	包含地	本表は石川県遺跡地名表をもとに作成したものである。				

## 2 調査の概要

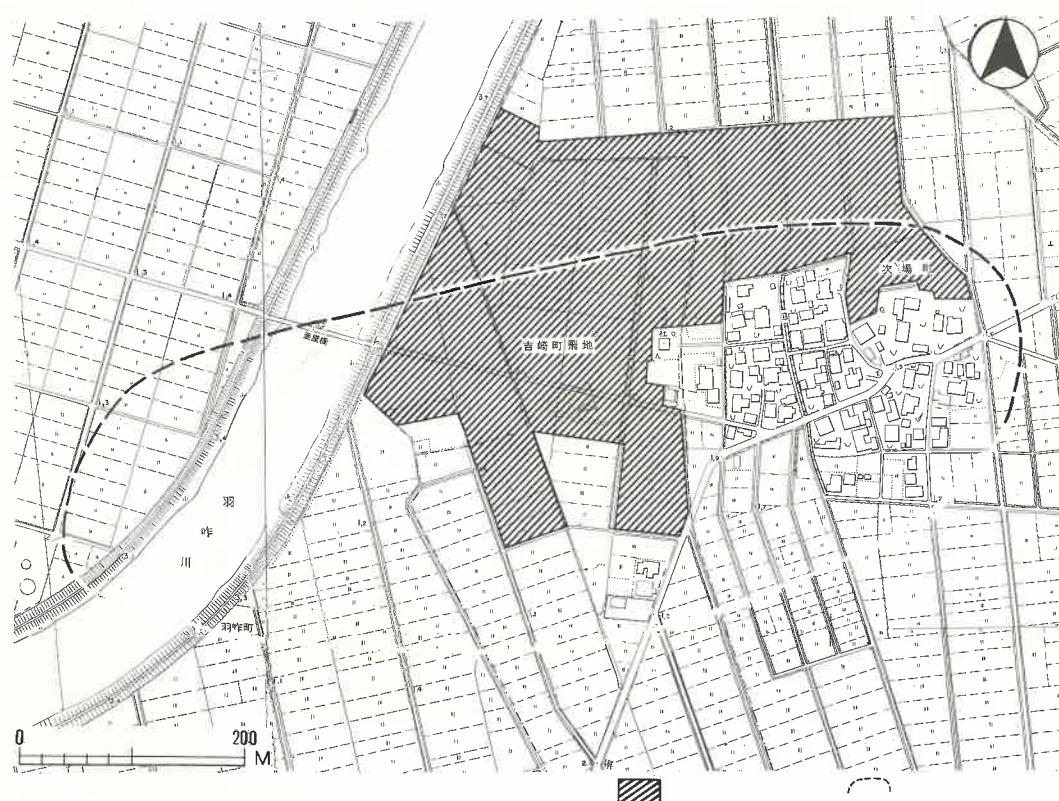
### 調査範囲（第2図）

昭和31年、同38年の2次にわたる発掘調査の結果などより、遺跡は邑知潟に面した微高地上の畑地を中心に北側水田部一帯に拡がっているものと推定される。

こうしたことから今回の分布調査の予定範囲は畑地全面と北側水田部を包括する、東西約400m、南北約200mの範囲とした。この範囲に10m間隔を単位とする碁盤割による地区割を行ない、20m間隔ごとに、2×10mの大きさのトレントによる発掘区を設定し、調査を進めることとした。

なお、畑地にかかる部分に関しては耕作中の畑にトレントを設定することを極力避けたため、調査地点は制約され、トレントの大きさも画一的なものとはならなかった。

また、遺跡の中心部を東西に走る市道が釜屋橋のかけかえ工事に伴なって、拡幅される計画が予定されているため、市道の両側にあたる、破壊される恐れのある部分については特に入念な遺構確認調査を行なうこととした。市道に沿って、2×10Mの大きさのトレントを基本に13個のトレントを配置し、遺構の分布状況とその概括的な性格を把握すべき調査を進めた。



第2図 調査範囲全体図

## 調査の方法

今回の調査は遺構および遺物包含層の分布状況とその性格をある程度明らかにすることで、遺跡の全体的な拡がりと集落構成の概略を把握し、将来への保存対策を講ずるための基礎資料を得ることを目的に調査を行なった。

そのため、従来、県内でのこの種の分布調査でとられてきた、小規模な坪掘りで遺物出土の有無を調べ、遺跡の範囲を決定するといった、問題の多い、あいまいな方法は避けた。

調査地点に設定した試掘溝は一定程度、遺構の検出が可能であると思われる、 $2 \times 5\text{ m}$ の大きさのトレンチを基本にし、状況に応じて拡張した。発掘は耕土より人力で掘進し、層位ごとに平面調査を実施して遺構の検出にあたった。また地点によっては、無遺物層まで深く掘り下げ、地山の堆積状態を調べ、当時の地形的条件の復元をこころみ、遺構立地の概要を把握した。遺構は検出面でそのプランの概略を調査したにとどめ、内部の完掘は行なわない方針でのぞんだ。しかし、年代と性格をつかむため、一部完掘したものもある。

発掘による遺構の現状破壊は当然のこととして考えられたので、各トレンチごとに平面実測図と堆積土層図を作製し、その正確な位置を全体図に記録し、併せて写真撮影も行ない、将来の発掘調査にそなえた。また、出土遺物の取り上げは、完掘した遺構に伴なうものを除き、基礎資料として必要な最小限度にとどめ、多くは現状のまま埋め戻した。

## 遺跡の基本的層序と遺物包含層

現在、畠地となっている部分は現地表で標高 $1.5\text{ m} \sim 2\text{ m}$ を測る起伏をなす微高地で、現水田面と $50\text{ cm} \sim 100\text{ cm}$ の比高をもつ。

土層の堆積層序は上から耕作土、床土と続き、耕土には後に海岸砂が客土されている場合もあるが、おおむね黒灰色を呈する砂質土である。床土は赤褐色ないし黒褐色の粘質土ではほぼ平坦に堆積する。以上の2層で $30\text{ cm} \sim 50\text{ cm}$ の厚さをもつ。地表面で遺物の散布が見られる場合は、この2層中にも遺物が含まれているが、攪乱層を除いては明確な遺構は存在しない。

また、この2層の堆積が厚く、遺構検出面が攪乱されていない場合は遺物は全く含まれしないことから、後世の堆積土と考えてよいであろう。これに續いて、黒茶色あるいは黒灰色の粘質土が $5\text{ cm} \sim 10\text{ cm}$ の厚さで入り込む場合がある。これはときには浅い土塙状遺構や溝状遺構を形成するが、遺物を含むことは殆んどない。その下は、灰色を基調とした青灰色、黄褐色を呈する砂質土層となり、この層は下方に深くなるに従って、土質がちみつになり、漸移的に色調が暗くなる。これは水稻耕作を生産の基盤とした弥生時代の遺跡周辺に通有に分布すると指摘されている、グライ層である。今回の調査で検出された殆どの遺構はこの層を切り込んで構築されており、この層が弥生時代を通じて、本遺跡の生活面を形成していたものと考えられる。

弥生時代の遺構が検出される部分では、このグライ層の上に黒色あるいは黒褐色の粘質土が薄く堆積をみて、遺物包含層を形成する。また、この層が遺構内に入り込み覆土となる場合が多く、その遺構内の堆積は下位に下る。従って漸移的にその色調が薄まり、土質は砂質に移行する。そのため、グライ層面での遺構の検出は比較的容易である。

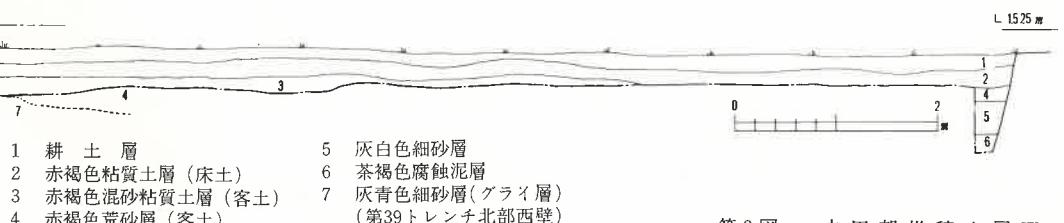
今回の調査で、各地点での土層を入念に観察したにもかかわらず、包含層は2層に区別は出来ず、上層式土器を伴なう遺構と下層式土器を伴なう遺構はほぼ同一の層位面で検出され、平面的に重複することが確認された。遺物包含層は弥生時代を通じて、長期間にわたって堆積したものと考えられ、上層式土器期の遺構の掘り込み面はやや上位と思われるが、その土層の相違での時代区分は不可能であった。

この弥生時代の遺物包含層を切り込んで、地山のグライ層に達する溝状遺構を主体とする遺構が存在する。これらの遺構には奈良・平安時代の須恵器を包含する灰褐色あるいは茶褐色の粘質土が覆土として入り込むため、明確に弥生時代の遺構と区別できる。しかし、遺構上面には包含層を形成することなく、その掘り込み面は床土および耕作土にかかるものと考えられる。

次に水田地域であるが、現地表で標高 $1.1 \sim 1.3\text{ m}$ を測り、開田整地の際、微高地を削平した部分と、低地を埋め立てた部分がある。

畠地に近い部分では畠地と同様な層序を示し、グライ層の上に黒褐色粘質土がのり、遺物包含層を形成する。ただ戦後の耕地整理で地形がかなり削平されているため、遺構面が攪乱を被っており、遺物が散在するが、遺物包含層の遺存状態がかなり悪いところもある。

旧地形は序々に北方に緩傾斜し、床土の下に荒砂、灰白色細砂の堆積が現われ、堆積土に変化がみられるようになる。そして、畠地北端部より北に $30 \sim 50\text{ m}$ の地点で、地山面のグライ層が急に傾斜度を強めて、深く落ち込み、黒褐色粘質土の遺物包含層がみられなくなる。この付近が自然堤防状に拡がる微高地の北端で、居住地域の北限を画するところと考えられる。これより北では、堆積土層は第3図に示したような堆積を示す。現水田床土の下に一見地山と見過まる全く遺物を含まない黄色荒砂、灰白色細砂が $50 \sim 80\text{ cm}$ の厚さで堆積する。この厚い無遺物層の下に暗灰褐色または暗茶褐色を呈するやや軟質の腐蝕泥層が堆積する。この腐蝕泥層は広範囲に分布し、湿地性の植物遺体とともにところによっては土器片や加工木器片を含む。当時、この腐蝕泥層が分布する一帯は沼沢性の湿地帯であったことを示している。



第3図 水田部堆積土層図

## 分布の状況（第4図）

### 第1・2・5トレンチ

畠地南西端に設定したトレンチである。

耕土・床土層の堆積が少なく、表土下約20~30cmで遺構検出面=地山面に達する。遺物包含層の堆積はほとんどみられないが、比較的遺構検出面の攪乱が少なく、遺構の遺残状態は良好である。円形の土壌状遺構が分布する地点で、時期的には下層式土器が伴なう。第5トレンチで検出された大型の長円形プランの土壌は壙底より上面まで多量の土器片が充積しており、一部完掘された。詳細は後述する。

### 第3・4・14トレンチ

畠地西端、道路の両側に設定したトレンチである。

この一帯の畠地には海岸砂が客土されているため、表土下遺構検出面まで約50~70cmと深く、遺構の遺残状態はきわめて良好である。床土層の直下に約10cmの厚さで黒褐色粘質土が遺構検出面まで堆積するが遺物はほとんど含まない。上層式土器と下層式土器が重複して分布する地域で、第4トレンチでは下層式土器が伴なう円形の土壌状遺構、第14トレンチでは上層式土器が伴なう溝状遺構が検出された。

### 第6・7・8・9・10・11・12トレンチ

畠地中央部、道路南側に設定したトレンチである。

この一帯の畠には土器片が地表面にかなり散布しており、遺構面の耕作による攪乱が著しいものと思われた。表土下約30~50cmで遺構検出面=地山面に達し、床土層下に薄く堆積する黒褐色の遺物包含層には下層式土器、上層式土器、須恵器が混在して認められ、包含層の攪乱が著しい。しかし、地山に掘り込まれた遺構は明確に把握できる。遺構は円形の土壌状遺構と溝状遺構が主体でかなり密集した分布状況を示す。円形の土壌状遺構には下層式土器が伴ない、住居址となる可能性のある落ち込みも検出されている。溝状遺構は上層式土器、および須恵器を伴なうものが主である。

### 第15・16・17・18・19トレンチ

畠地中央部、用水路の西で道路北側に設定したトレンチである。

地表面にかなりの土器片の散布がみられるが、遺構の遺存状態は比較的良好である。表土下約30~50cmで遺構検出面=地山に達し、遺物包含層の堆積はほとんどみられない。

下層式土器、上層式土器、須恵器（平安期）を伴なう遺構が重複して分布する地域である。

道路側に面した地点では下層式土器を伴なう土壌状遺構が多いが、北方にゆくに従って上層式土器を伴なう遺構が主体的になる。溝状遺構は須恵器を伴なうものが多い。

### 第20・21・24トレンチ

畠地北部、用水路の東に設定したトレンチである。

遺構検出面まで約30~40cmと浅く、遺物包含層は攪乱され耕土・床土層との区別がはっきりしなく、かなりの土器片が地表面に散布している。遺構は地山面に深く掘り込まれたもののみが明確に把握できる。上層式土器を伴なう土壌状遺構と溝状遺構が多くみられ、下層式土器の出土は少量でほとんど遺構が伴なわない。

### 第13・23・25・27トレンチ

用水路の東、道路の両側に設定したトレンチである。床土層下に黒褐色土の遺物包含層が約10cmの厚さで堆積する。包含層は下層式土器を主体としたもので、遺構もそれに伴なう溝状遺構、土壌状遺構、住居址と考えられる落ち込み遺構が発見されている。

特に第23・25トレンチで確認された包含層は黒褐色粘質土の焼土粒、炭化物粒を含むしっかりとしたもので、かなりの土器片を包含しており、竪穴住居址の覆土をなす可能性が強い。また、第13トレンチ中央部で検出された溝状遺構は断面V字状をなすいわゆるV字溝で、巾約3m、深さ約1.6mを測るしっかりとしたもので遺跡地を南北に走る。時期は下層式土器を伴なう。

### 第26・27・28トレンチ

道路に側した畠地東端に設定したトレンチである。

比較的規模の大きいトレンチを設定したにもかかわらず、遺構・遺物の分布が疎で、遺物を全く伴わない溝状遺構の存在を確認したにすぎない。表土下約30~50cmで地山面に達する。地山面の上には約20cmの厚さで茶褐色粘質土層が堆積し、この層には若干の須恵器片（平安期）を含む。検出した溝状遺構はこの層の下面より掘り込まれており、先行する遺構と考えられる。

この地点より東の第44・51トレンチおよび道路をはさんで南側の水田に入れた試掘ピットより下層式土器を伴なう遺構および包含層が発見されており、本地点が遺跡の東限を示すものとは考えられない。集落の中の空白地点であり注目される。

### 第29・30・31・32・33・34トレンチ

北側水田部、羽咋川よりに設定したトレンチである。

第29・31トレンチ設定地点より北は地山が急に落ち込み、地山面の上に暗茶褐色粘質の腐蝕泥層が堆積する。この腐蝕泥層は多量の植物遺体とともに若干の弥生式土器片を包含する。弥生式土器片はかなり磨滅した細片で二次的に混入した可能性が強いものである。

第29・31トレンチ設定地点が一応の集落の北限と考えられる。

### 第35・36・39・41・42・44・45・46・51・52トレンチ

北側水田部、畠地沿に設定したトレンチである。

戦後行なわれた耕地整理により旧畠地が削平され水田化されたところである。表土より地山面まで30~40cmと浅く、地形がかなり削平されているため遺構面が攪乱を被って、遺物包含層の遺

存状態がかなり悪い地点もある。ほぼ畑地と同様の層序を示し、地山面の上に黒褐色粘質土が堆積し、遺物包含層を形成する。包含層は約2~10cmと薄く攪乱されているため、下層式土器、上層式土器、須恵器、土師器が混在した状態で出土をみている。第35・36・39・41トレンチでは上層式土器の出土が相対的に多く、遺構もその時期のものが多いが、第44・45・51トレンチでは下層式土器の出土が多くなり、それに伴なう土壌状遺構、溝状遺構が発見されている。また、この地点ではわずかではあるが、下層式土器に先行する弥生式土器（柴山出村式土器）が出土している。

第36・39・42・46・53トレンチを結ぶ線で地山が落ち込み、黒褐色粘質土の遺物包含層が認められなくなり、かわって地山の上に暗茶褐色粘質土の腐蝕泥層が堆積するようになる。一応この地点が自然堤防状に拡がる微高地の端で、集落の北限を画するところと考えられる。

#### 第37・38・40・43・47・48・49・50・54・55・56トレンチ

畑地北端より50~100m離れた水田部に設定したトレンチである。

地山のグライ層が深く落ち込んでいる地帶で、約1.5~2m掘り下げても地山に達しない。

現水田床土の下に一見地山と見過まる全く遺物を包含しない黄色荒砂、灰白色細砂が50~80cmの厚さで堆積する。この層は耕地整理の際、客土されたものと考えられる。この厚く堆積する遺物層の下に暗灰褐色または暗茶褐色を呈するやや軟質の腐蝕泥層が堆積する。

この腐蝕泥層は広範囲に分布し、湿地性の植物遺体とともに、ところによっては土器片や加工木器片を包含する。出土した土器片はかなり磨滅した細片がほとんどで、生活遺構に伴なうものと思われない。時期的には若干の須恵器片を含むが、ほとんど上層式土器と下層式土器片である。少し深く掘ると湧水が激しく、地山面まで検出できなかったが、當時この腐蝕泥層が分布する一帯は沼沢性の湿地帯であったと思われ、当時の水田址が発見される可能性が強い。

#### 第57・58・59・60・61・62・63・64トレンチ

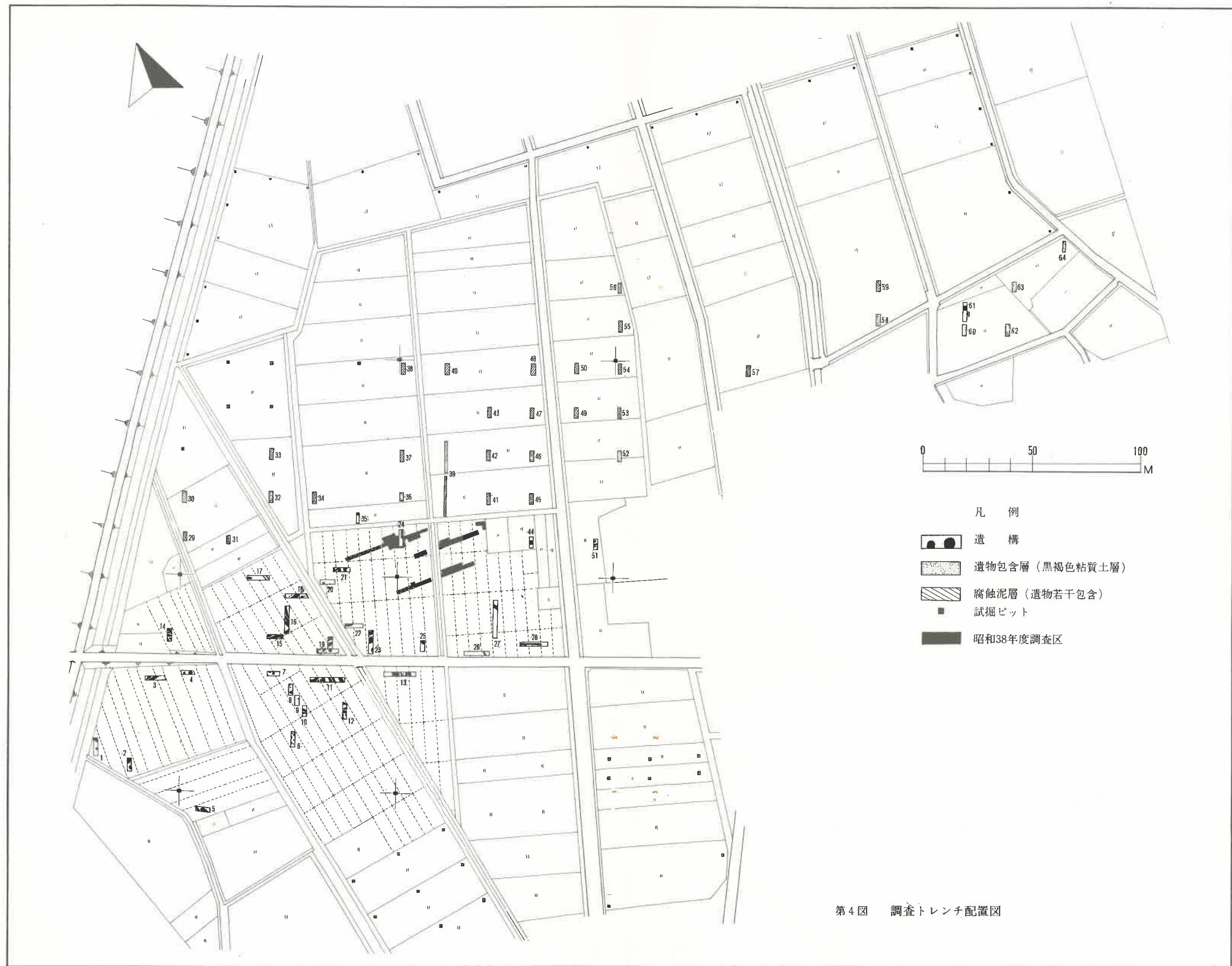
現次場町並の北方の水田部、遺跡の北東限と考えられるところに設定したトレンチである。

第57・59・63・64トレンチに地山面の急な落ち込みが確認され、これより北は腐蝕泥層が厚く堆積する。一応このトレンチを結ぶ線が当時の集落の北東限を画するものと考えられる。第58・61・60トレンチで比較的良好な遺物包含層の分布が確認されており、第61トレンチでは土壌状遺構と溝状遺構が検出された。

第60・61・62トレンチでは現地表面より地山面まで約20~40cmと浅く包含層より、須恵器、下層式土器、上層式土器が混在した状態で出土する。主体は下層式土器で、一部それに先行するものと考えられる弥生式土器（柴山出村式土器）で相当量出土しており注目される。

この地点より南の現在宅地となっている部分でも過去にかなりの弥生式土器が出土しており、遺跡は現在の次場町内を包括する形で南に延びているものと思われる。

〈谷内尾 晋 司〉



第4図 調査トレンチ配置図

第2表 検出遺構・遺物一覧表  
 (弥=弥生時代 奈=奈良時代  
 土師=古墳時代 平=平安時代)

ト番 レ ン チ号	遺構(時期)	遺物	地山のレベル(m)		備考
			標高	地表下	
1	溝(弥・中) 土壙(弥・中)	弥生式土器(中)		0.2 1.2	遺構未掘
2	溝(不明) 土壙A(弥・中) 〃B(弥・中)			0.25 1.1	・ 遺構未掘
3	溝A(弥・後) 溝B(弥・後)	弥生式土器後	1.0	0.6	
4	土壙A(弥・中) 〃B(弥・中)	弥生式土器・木器 編物片・樹木遺体・植物実遺体	1.1	0.75	土壙Aより エブリ出土
5	溝(弥・後) 土壙(弥・中)	弥生式土器(中・後) 軽石・植物遺体	1.1	0.5	壺内部より 炭化米検出
6	溝・柱穴(不明)	弥生式土器	0.7	0.3	遺構未掘
7	土壙A(弥・中) 〃B(弥・中) 〃C(不明)	弥生式土器 土錘・碧玉片		1.0	0.5 遺構未掘
8	土壙(弥・中) ピツト(不明)	弥生式土器 碧玉原石	1.1	0.55	遺構未掘
9	ピツト(不明)	弥生式土器	1.2	0.4	〃
10	溝A(弥・中) 〃B(奈・平) 〃C(平・後)	弥生式土器・紡錘車 須恵器		1.1	0.5
11	溝A(弥・後) 〃B(平安) 〃C(不明) 〃D(〃) 〃E(〃) 〃F(〃)	弥生式土器 土師器・須恵器	0.8	0.6	
12	溝A(不明) 〃B(〃) 〃C(〃) 落ち込み(弥・中)	弥生式土器(中・後)		1.2	0.3 遺構未掘 落ち込みは 住居址か?

ト番 レン チ号	遺構(時期)	遺物	地山のレベル(m)		備考
			標高	地表下	
13	溝 A(弥・中・後) 〃 B(平安) 〃 C(〃) 落ち込み(弥・中)	弥生式土器(中・後) 加工木片 樹木遺体	1.1	0.5	溝Aを残いて 遺構は未掘
14	溝 A(弥・後) 〃 B(弥・後) 〃 C(弥・後) 土 壤(弥・後)	弥生式土器(後)	1.1	0.5	
15	溝 (平安) 土 壤 A(弥・中) 〃 B(弥・中) 〃 C(弥・中)	弥生式土器(中) 須恵器・土師器 植物遺体	1.0	0.4	土壤2基は 未掘
16	溝 A(平安) 〃 B(弥・後) 〃 C(弥・後) 〃 D(弥・後)	弥生式土器(中・後) 須恵器・石鎚	1.0	0.6	
17	溝 A(平安) 〃 B(〃) 土 壤(弥・後)	弥生式土器 須恵器	1.1	0.3	遺構未掘
18	溝 (弥・後) 土 壤(弥・中)	弥生式土器 樹木遺体	1.0	0.4	遺構未掘
19	溝 A(弥・中) 〃 B(平安) 〃 C(〃) 土 壤(弥・中)	須恵器 弥生式土器(中) 土 錘 不明木器片	1.1	0.5	
20	土 壤(弥・後)	弥生式土器	1.3	0.3	遺構未掘
21	溝 A(弥・後) 〃 B(弥・後) 〃 C(不 明) 土 壤(弥・後)	弥生式土器(後)	1.2	0.3	遺構未掘
22	溝 (弥・中)	弥生式土器(中)	1.1	0.4	遺構未掘
23	溝 (平安) 土 壤(弥・中) 落ち込み(弥・中)	弥生式土器(中・後) 須恵器	1.1	0.6	落ち込みは住 居址となる可 能性あり

ト番 レン チ号	遺構(時期)	遺物	地山のレベル(m)		備考
			標高	地表下	
24	落ち込み(弥・後) 配石遺構(弥・後)	弥生式土器(中・後)	1.1	0.5	昭和38年度 調査区
25	住居址(弥・後)	弥生式土器	1.0	0.5	一部調査
26	溝 (不 明)	な し	1.2	0.5	遺構未掘
27	溝 (不 明)	〃	1.1	0.4	遺構未掘
28	溝 A(不 明) 〃 B(〃) 〃 C(〃)	な し 〃 〃	1.1	0.3	
29	腐蝕泥層(遺物包含)		1.1	0.5	
30	〃	土器片若干・植物遺体	腐蝕泥層まで 0.8	地山まで掘らず	
31	〃	土器片若干・植物遺体	1.2	0.5	
32	〃	土器片若干・植物遺体	0.6	0.5	
33	〃	土器片若干・植物遺体	腐蝕泥層まで 0.8	地山まで掘らず	
34	〃	土器片若干・植物遺体	0.7	0.4	
35	溝 (不 明)	弥生式土器片若干	1.0	0.3	遺構未掘
36	腐蝕泥層(遺物包含)	土器片若干・植物遺体	1.0	0.2	
37	〃	土器片若干・植物遺体	腐蝕泥層まで 0.8	地山まで掘らず	
38	腐蝕泥層(遺物包含)	土器片若干・植物遺体	腐蝕泥層まで 1.0		
39(単)	溝(弥・中)、腐蝕泥層	弥生式土器・須恵器	1.0	0.3	
39(北)	腐蝕泥層(遺物包含)	土器片若干・植物遺体	腐蝕泥層まで 0.8	地山まで掘らず	
40	〃	〃 〃	〃	0.8	〃
41	包含層(弥生・中・後・平安)	弥生式土器・須恵器	0.9	0.4	
42	包含層(弥・中・後・土師)	弥生式土器(中・後)須恵器	0.9	0.4	
43	腐蝕泥層(遺物包含)	土器片・植物遺体	腐蝕泥層まで 0.8	地山まで掘らず	
44	溝(弥・中)	弥生式土器(中)	1.2	0.2	遺構未掘
45	包含層(弥・中・平安)	弥生式土器(中)須恵器 土師器・石器	0.9	0.4	
46	包含層(弥・中・後)	弥生式土器(中・後)	0.8	0.4	
47	腐蝕泥層(遺物包含)	土器片若干・植物遺体	腐蝕泥層まで 0.8	地山まで掘らず	
48	〃	〃	〃	0.8	〃
49	〃	〃	〃	0.8	〃
50	〃	〃	〃	0.8	〃

ト番 レン チ号	遺構(時期)	遺物	地山のレベル(m)		備考
			標高	地表下	
51	溝(弥・中) 土壙(弥・中)	弥生式土器(中・後)	1.0	0.3	遺構未掘
52	包含層(弥・中・後)	弥生式土器(中・後)	0.7	0.6	
53	" (" )	"	0.8	0.4	
54	腐蝕泥層(遺物包含)	土器片若干・植物遺体	腐蝕泥層まで 1.0	地山まで掘らず	
55	" (" )	"	"	1.0	"
56	" (" )	"	"	1.0	"
57	包含層(弥・中、土師)	弥生式土器(中) 土師器	0.9	0.3	
58	" (" )	"	0.9	0.4	
59	腐蝕泥層(遺物包含)	土器片若干・植物遺体	腐蝕泥層まで 1.0	地山まで掘らず	
60	包含層(弥・中・後)	弥生式土器(中・後)	1.0	0.2	
61	溝(平安) 土壙(弥・中)	弥生式土器(中・後) 須恵器・土師器・石器	0.8	0.4	
62	包含層(弥・中・後)	弥生式土器(中・後)	0.9	0.3	
63	腐蝕泥層	植物遺体	腐蝕泥層まで 1.0		
64	"	"	"	1.0	



調査風景 2

### 3 遺構の概要

遺跡の基本的層序、調査区全体における遺構のあり方等については、すでに前章で述べられているので、ここでは、いくつかのトレンチをとりあげ、その内容について概説する。

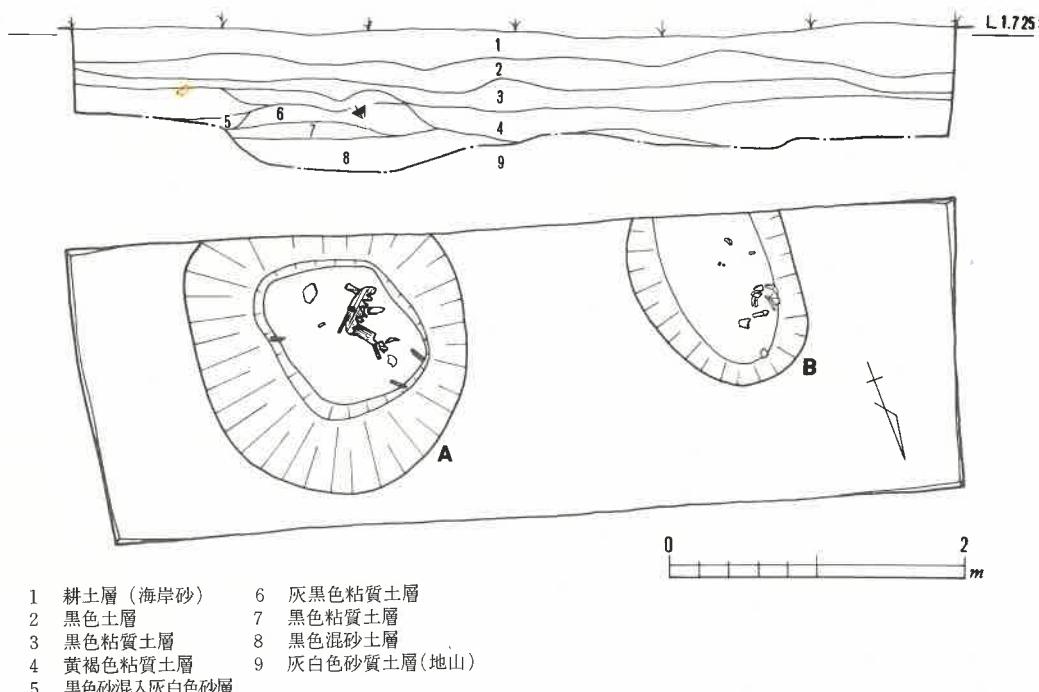
#### 第4トレンチ(第5図、図版2、5)

ほぼ東西方向に設けた、2×5mのトレンチである。

土層は、ほぼ水平な堆積状態を示し、地表下50~60cmで地山面に達する。

土壙Aは、第5層・黒色砂混入の灰白色砂層以下で構成され、深さ約50cm、肩部での短径180cmを測る。楕円形を呈する有段の土壙である。段部まで、約30cm。以下は不整方形の壙になる。段部には30~80cmの長さをもつ、棒状の樹木遺体が約10本、倒れた状態で出土した。この面では、植物種子、土器片、編物片を検出している。二段目の壙は、黒色砂質土で構成され、えぶり、加工木片、下層式土器片、ひょうたん、同種子を検出している。

この土壙は、貯蔵穴的な性格を強くおびるもので、段部で出土した樹木遺体は、上屋的な被覆施設を形成していた可能性が大きい。



第5図 第4トレンチ実測図

### 第5トレンチ (第6図、図版2、5)

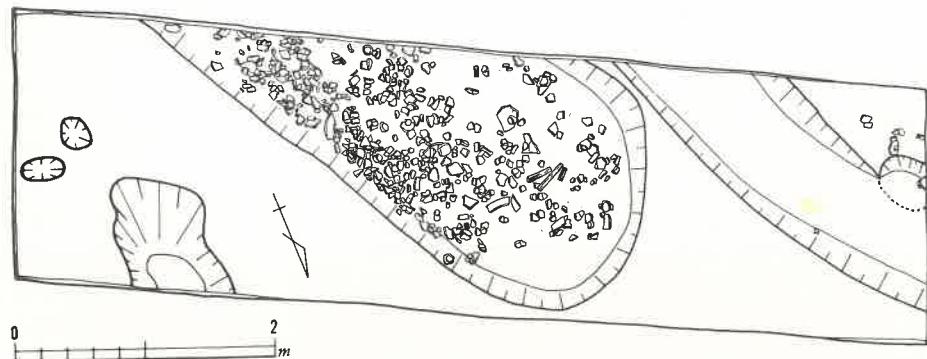
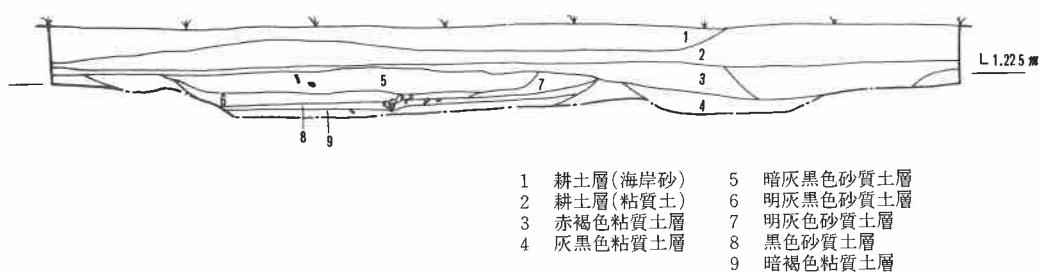
畑地の南端部に設けた、 $2 \times 7\text{ m}$ のトレンチである。

土層は水平で、地表下約40cmで地山面に達する。

ここでは、地山を切り込んだ、南北に走る溝状遺構と、それに並ぶ土壙状遺構、そして、数個のピットを検出した。溝状遺構とピットからは若干の土器片を検出したにとどまるが、土壙状遺構より、軽石、炭化材、植物遺体、そして、多量の土器を検出した。

土壙状遺構は、幅約2m、深さ15~20cmを測るもので、隅丸長方形を呈するものと思われる。

第5層から第8層までに、殆んどの土器は包含され、第9層・暗褐色粘質土層中には、植物遺体が多く見られる。壙内全体には炭が多い。



第6図 第5トレンチ実測図

### 第19トレンチ (第7図、図版2、5)

東西方向に設け、北側に拡張したT字型のトレンチであるが、ここでは東西部のみを紹介する。

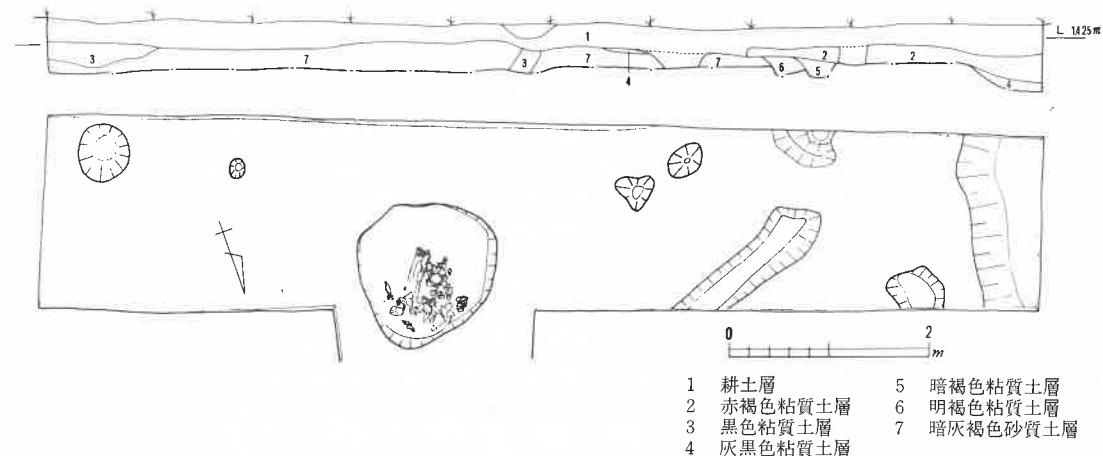
$2 \times 10\text{ m}$ 。

耕土層とその下の暗灰黑色砂質土層を除くと地山面が現われる。地表下約50cmである。

地山を切り込んだ遺構には、中央部の円形土壙、西側の溝状遺構と落ち込み、そしてそれらの周囲の6個のピットがある。北東にのびる溝状遺構から、完形の小型壺形土器を検出している。

円形土壙は、径140cm、深さ30cmを測るもので、壁面は、ほぼ直立する。内部は、炭化した木材小片を含む黒色粘質土から成り、数個体の土器と土錐、腐朽の著しい板状の樹木遺体、焼石を

検出した。貯蔵穴的性格をもった土壙である。



第7図 第19トレンチ東西部実測図

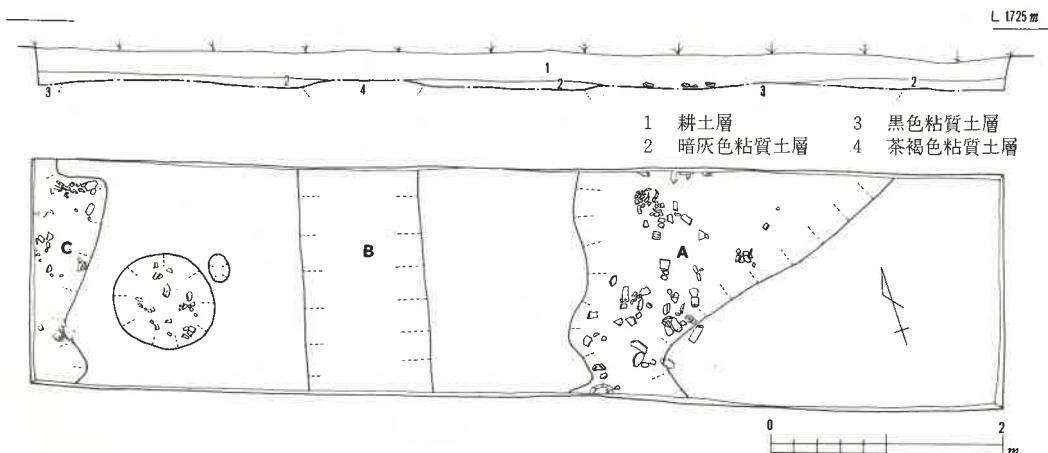
### 第21トレンチ (第8図、図版2、5)

東西方向に設けた、 $2 \times 8\text{ m}$ のトレンチである。

耕土層の下に、薄く、暗灰色粘質土層があり、その下に地山が現われる。地表下約30cmである。

この地山を切り込んで、3本の溝状遺構と1基の土壙が存在する。溝状遺構A、Cは不整な形状を呈する。

遺構はいずれも未掘であるが、黒色粘質土を覆土とする、溝状遺構A、Cと円形土壙の上端部で、次場上層式土器を検出している。溝状遺構Bは、茶褐色粘質土より成る。



第8図 第21トレンチ実測図

### 第61トレンチ (第9図、図版4)

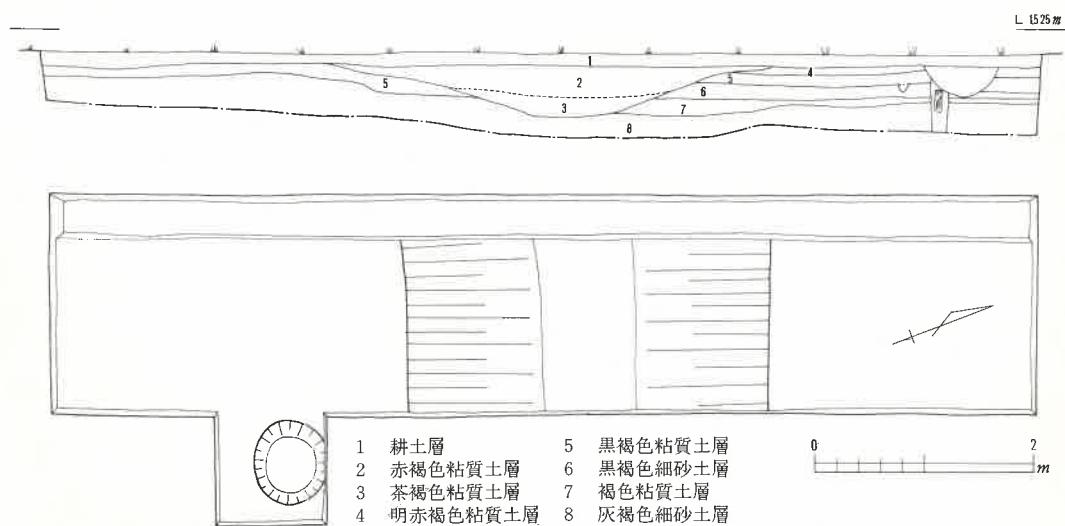
水田地の東部において、南北方向に設けた、 $2 \times 9\text{ m}$ のトレンチで、 $1 \times 1\text{ m}$ の拡張区を設けた。

東西方向に走る大きな溝は、深さ $0.5\text{ m}$ 、肩部で $3.2\text{ m}$ 、底部で $0.5\text{ m}$ の幅をもつもので、ゆるやかに落ち込む。床土面より掘り込まれたもので、新しい。遺物は殆んど含まない。

第8層・灰褐色細砂中には、湿地性植物の遺体が多く見られる。

拡張区の円形土壙は、径約 $80\text{ cm}$ 、深さ約 $15\text{ cm}$ を測るもので、内部から大型蛤刃石斧、粗製条痕系土器片を含む弥生式土器を検出した。

この土壙を含めて、拡張区全体は、かなり攪乱を被った状態にあり、検出した遺物のなかには、石器、弥生式土器もあれば、平安期の須恵器もあるといった状態である。 <三浦純夫>



第9図 第61トレンチ実測図 (平面は略測図)

## 4 出土遺物

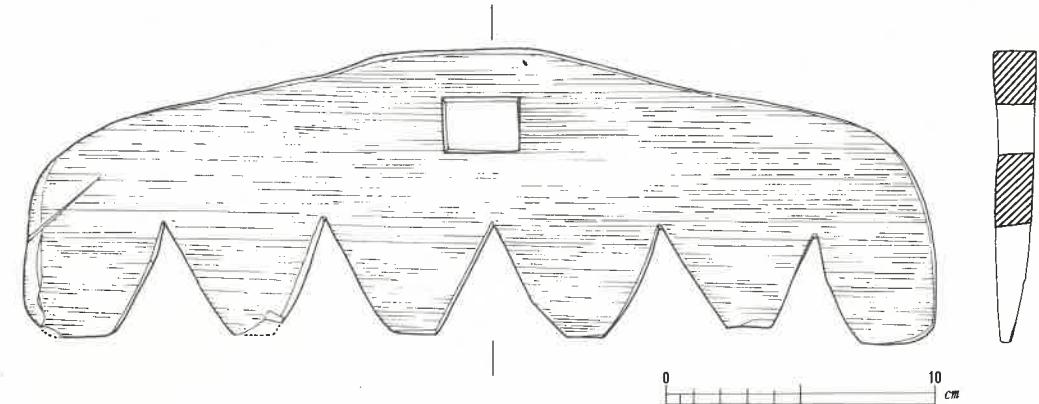
今回の調査で出土した遺物は、土器、石器、木器、植物遺体、樹木遺体に大別されるが、その他に、編物片、炭化米、紡錘車がある。

ここでは、前章で紹介した遺構からの出土遺物を中心に概説を行なう。ただ、土器については、一部、復元なればのものがあり、本報告の段階で付加したい。

### 第4トレンチ土壙A出土遺物 (第10図、図版7、11)

#### えぶり (第10図、図版7)

6本の歯をもち、方形のほぞ穴を穿ったものである。丁寧なつくりで、第1次加工痕はうかがえない。幅 $34.2\text{ cm}$ 、高さ $10.8\text{ cm}$ 、歯の高さ $4.5\text{ cm}$ 、上端部の厚さ $1.7\text{ cm}$ 、歯先の厚さ $0.5\text{ cm}$ 、ほぞ穴は



第10図 第4トレンチ土壙A出土えぶり実測図

$3.0 \times 2.0\text{ cm}$ を測る。材質はカシである。

弥生時代のえぶりは、岡山県の上東遺跡<sup>①</sup>、静岡県の内中遺跡<sup>②</sup>、山木遺跡<sup>③</sup>、新潟県の千種遺跡<sup>④</sup>などで出土している。第11図に参考例としてこれらのうち3遺跡のものを示した。

上東遺跡、山木遺跡のものは、高さがひくい。後者は歯先を二つに刻んでおり、穀物の乾燥などの用途に供されたものと考えられている。内中遺跡のものは、水田でのえぶりす

り、えぶりつきなどの用途が考えられている。4例とも、後期に属するもので、材質は上東例がアラカシ、山木例はサクラである。

本遺跡のものは、歯の切り込みが大きく、柄もしっかりしたものと想定できることから、水田用のものと考えておきたい。時期は、下層式土器片を伴出していることから、中期後半代のものとなろう。

#### 編物片 (図版11)

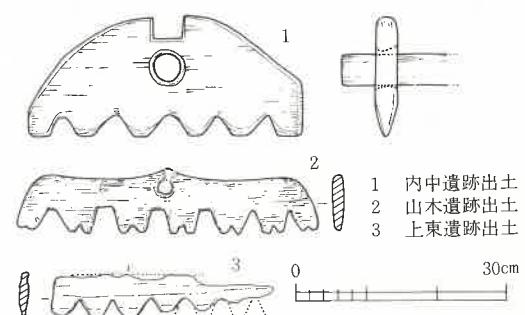
小片であり、遺存状態は悪い。経に、細い樹木、緯に葦状のものを用いている。笊あるいは籠であろう。

### 第5トレンチ土壙状遺構出土遺物 (第12、13、14、15図、図版7、8、9、11)

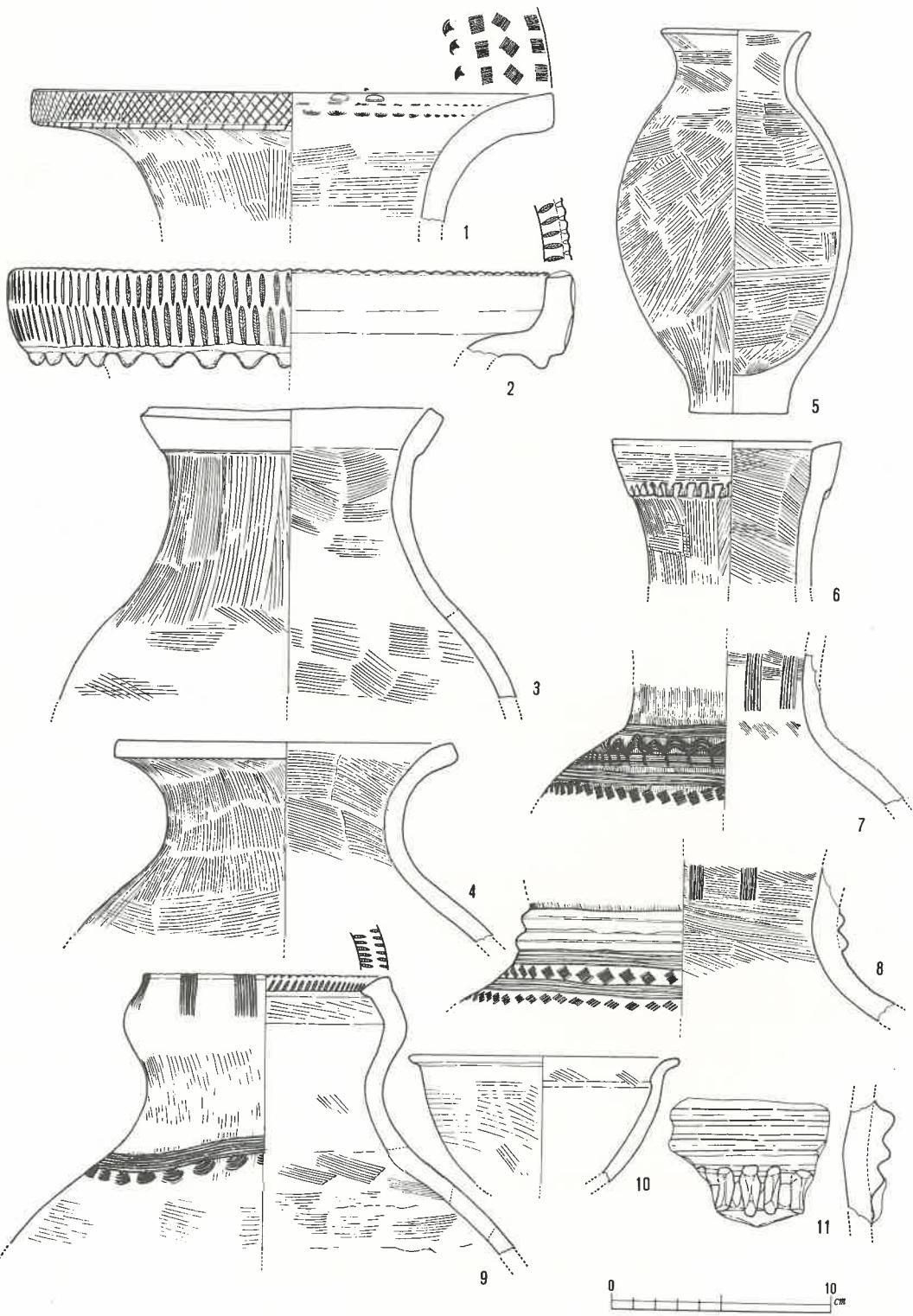
#### 壺形土器 (第12図1~9、11、第13、14図、図版7~9)

1は、大きく外反する口頸部片である。口径 $24.0\text{ cm}$ 。口縁部外端に櫛歯の刺突による斜格子文、下端に刻目文を連ねる。内面には、平行短線文、同斜位短線文、扇形文を配し、2個1対の円形浮文を施す。焼成は良好で、黄灰色を呈する。

2は、口径 $26.0\text{ cm}$ を測る有段の口縁部である。口縁部外端に、ヘラ先による鋭い刺突文を連ね、



第11図 弥生時代のえぶり実測図



第12図 第5トレンチ土壤状遺構出土土器実測図

下端は、粘土紐を貼り付け、山形に削り出す。上端にも刺突文が見られる。堅緻な焼きあがりを示し、灰褐色を呈する。

3は、筒状の頸部に外傾する口縁部がつくものである。口径13.8cm。内面頸部以下にナデ調整を加える。焼きはあまく、黄灰色を呈する。

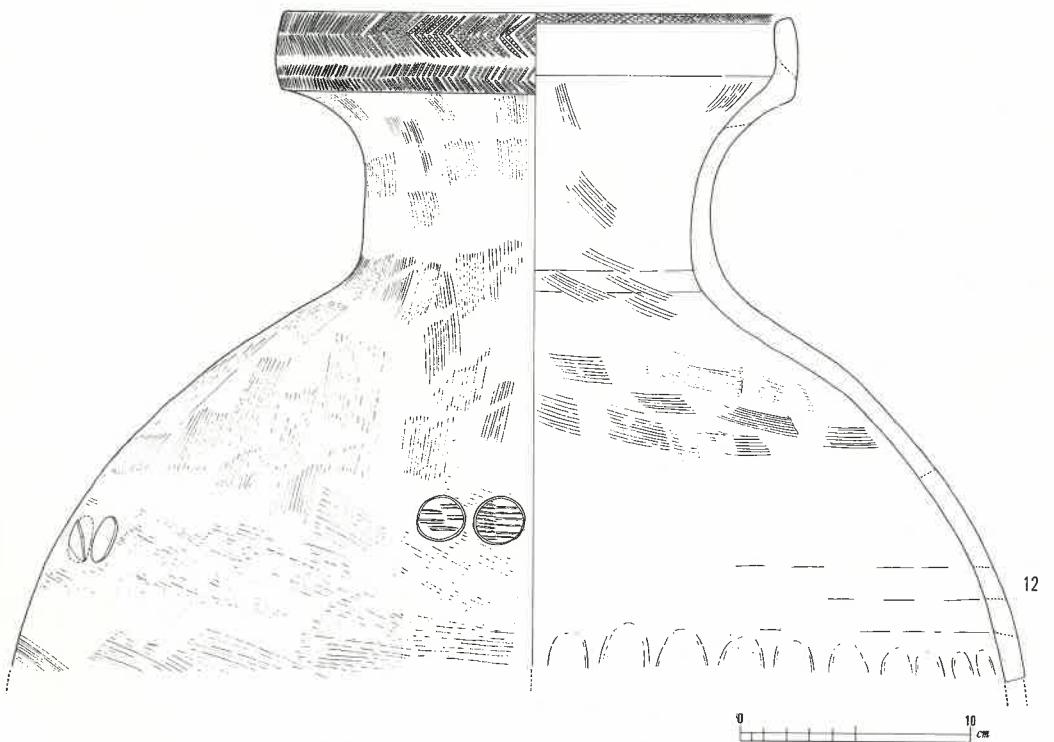
4は、口縁部が弧形を描いて外反するもので、口径15.7cmを測る。内面頸部以下は、ハケ調整にナデ調整を加える。焼きは良く、灰黄色を呈する。

5は、橈円形の体部をもつ小型品である。口径6.8cm、底径4.5cm、器高17.7cm。中位にある胴部最大径は10.6cmを測る。焼きはあまく、灰白色を呈する。

6は、筒状の口頸部である。口径10.5cm。口縁部下端に三角形刺突文をめぐらす。良選された土で、焼成も良い。明灰褐色を呈する。

7～9、17～21は肩部に櫛描文が見られるものである。

7は、上から見て右まわりに施文したことがわかる。8は櫛描文を施したあと、2帯の突帶を貼り付けている。9は袋状の口縁部をもつもので、胴部下位に最大径をもつものとなろう。平行線文は大きうねり、扇形文は全周で約 $\frac{1}{2}$ しか施されない。口縁端部にはヘラ先による刺突文、外面には、7、8の頸部内面で見られる「縦位櫛描文」が等間隔に施される。7、9はあまい焼きであるが、8は良い。



第13図 第5トレンチ土壤状遺構出土土器実測図

17では、片側につよくはねた、千鳥状の刺突文が見られる。19の斜位短線文は長さ、方向とも定まらず、21の波状文もうねりが小さく、不整なものである。

施文にあたっては、いずれも、まず平行線文を施し、その上、下、あるいは間隙に簾状文、波状文などを施している。櫛歯数は、7が5本、8、18~21が6本、9が7本、17が8本である。

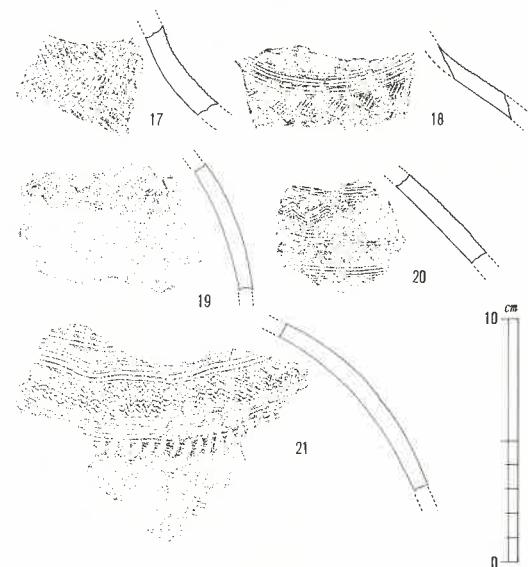
11は、頸部の一部である。一見、凹線的な貼り付け突帶のうえに棒状浮文を施す。焼成良好く、灰黄色を呈する。

12は、口径22.2cm、現存部最大胴径44.0cm、現存高28.5cmを測る大型

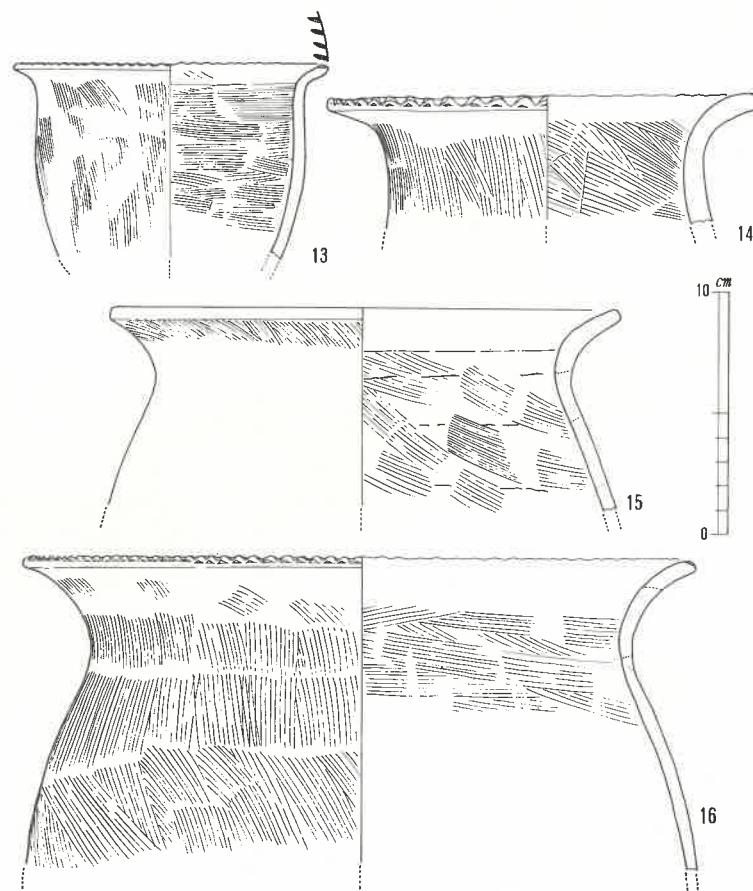
品である。受口状の口縁部外端にヘラ先による羽状文、上端に斜格子文をめぐらす。胴部には、2個1対の円形浮文を施す。この壺形土器は、塊状となった炭化米（図版11）を内蔵していたもので、炭化物の付着が見られる。焼成は良く、灰褐色を呈する。

#### 壺形土器（第15図、図版9）

13のように口径13.0cmの小型品から16のように27.7cmを測るものまである。口縁端部も波状につくるもの、あるいは無文のものがある。



第14図 第5トレンチ土壤状遺構出土土器拓影



第15図 第5トレンチ土壤状遺構出土土器実測図

13、14、16は波状口縁をもつものであるが、13は、ヘラ先による刺突によって、14、16は粘土紐を貼り付け、押圧を施して波状に作り出している。16は、焼きがあまい。15の口縁部は無文である。体部外面に丁寧にナデ調整を施す。焼成は良い。

#### 鉢形土器（第12図、10、図版8）

半球形の体部に、短かい口縁部がつく。灰褐色を呈し、堅緻である。

#### 第19トレンチ円形土壙出土遺物（第16図、図版9）

1は、筒状の体部をもつ壺形土器である。口径19.7cm、底径6.2cm、器高25.1cm、胴部最大径18.4cmを測る。口縁部は波状につくる。粘土紐貼り付け→押圧の手法である。焼きはあまく、明黄褐色を呈する。

3は、無頸壺の口縁部である。ヘラ先による羽状刺突文がめぐる。焼成は良く、黄灰色を呈する。

2の土錘は、2.5×2.3cmのやや不整な球形を呈するもので、堅緻である。灰黒色を呈する。

#### 第21トレンチ溝状遺構A出土遺物（第17図、図版10）

##### 壺形土器（1、8、9）

1は、外方に開く有段口縁をもつものである。8は、長頸壺の口頸部で、口縁部外端にかるいナデ状の擬凹線が見られる。9は、球形の体部をもつもので、内外面ともハケ調整が見られる。いずれも焼成は良い。

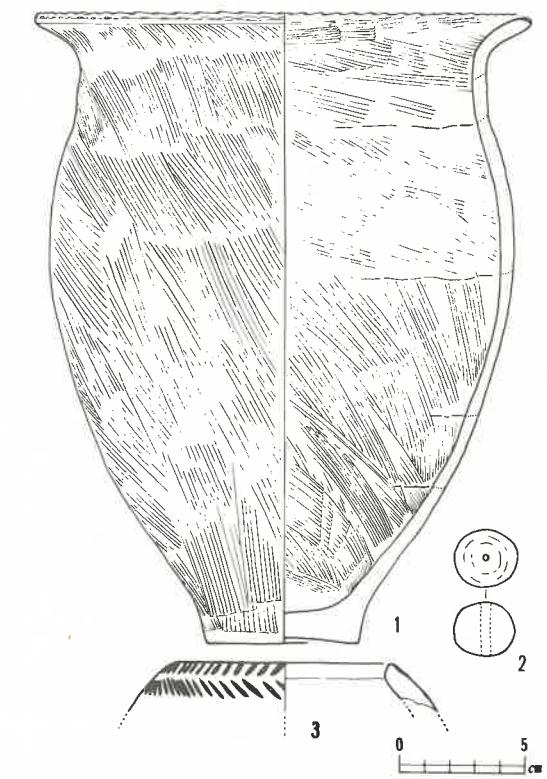
##### 壺形土器（2~7）

いずれも有段口縁をもつ。2は、受口状の口縁部をもち、外端にヘラ先による刺突文をめぐらす。5は、頸部のしめあげがあまい。2、3、5は、いずれも、焼きがあまく、内外面の剥離が著しい。4は、内面頸部以下にヘラケズリ調整を施すもので、焼成は良い。いずれも黄褐色系の色調を呈するものである。

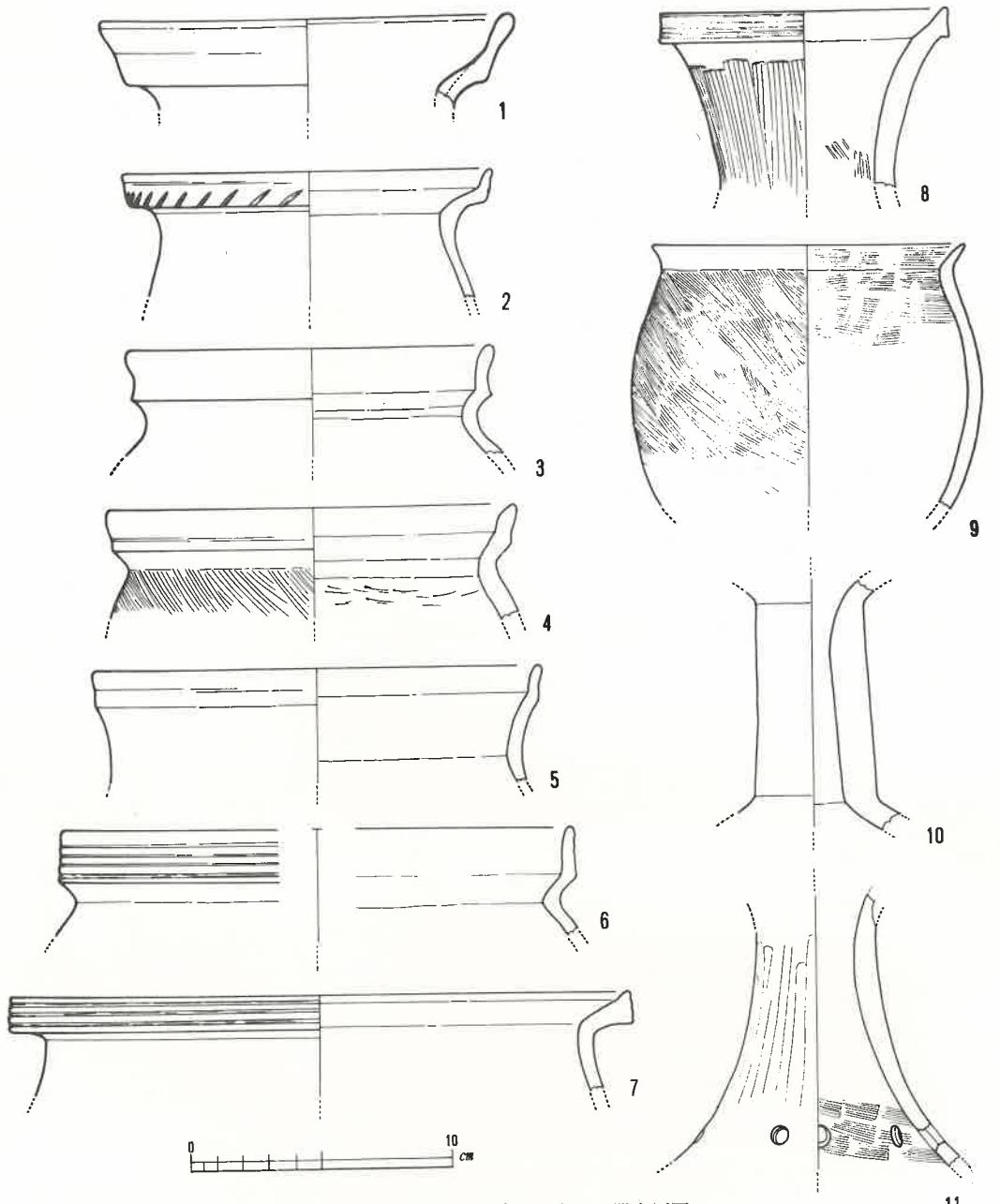
6、7は、口縁部外端に擬凹線を施すもので、焼きはあまく、剥離が著しい。

##### 高杯形土器（10、11）

10、11とも焼きがあまく、剥離が著しい。11の円孔は全周で7個となる。



第16図 第19トレンチ土壤出土土遺物実測図



第17図 第21トレンチ溝状遺構A出土土器実測図

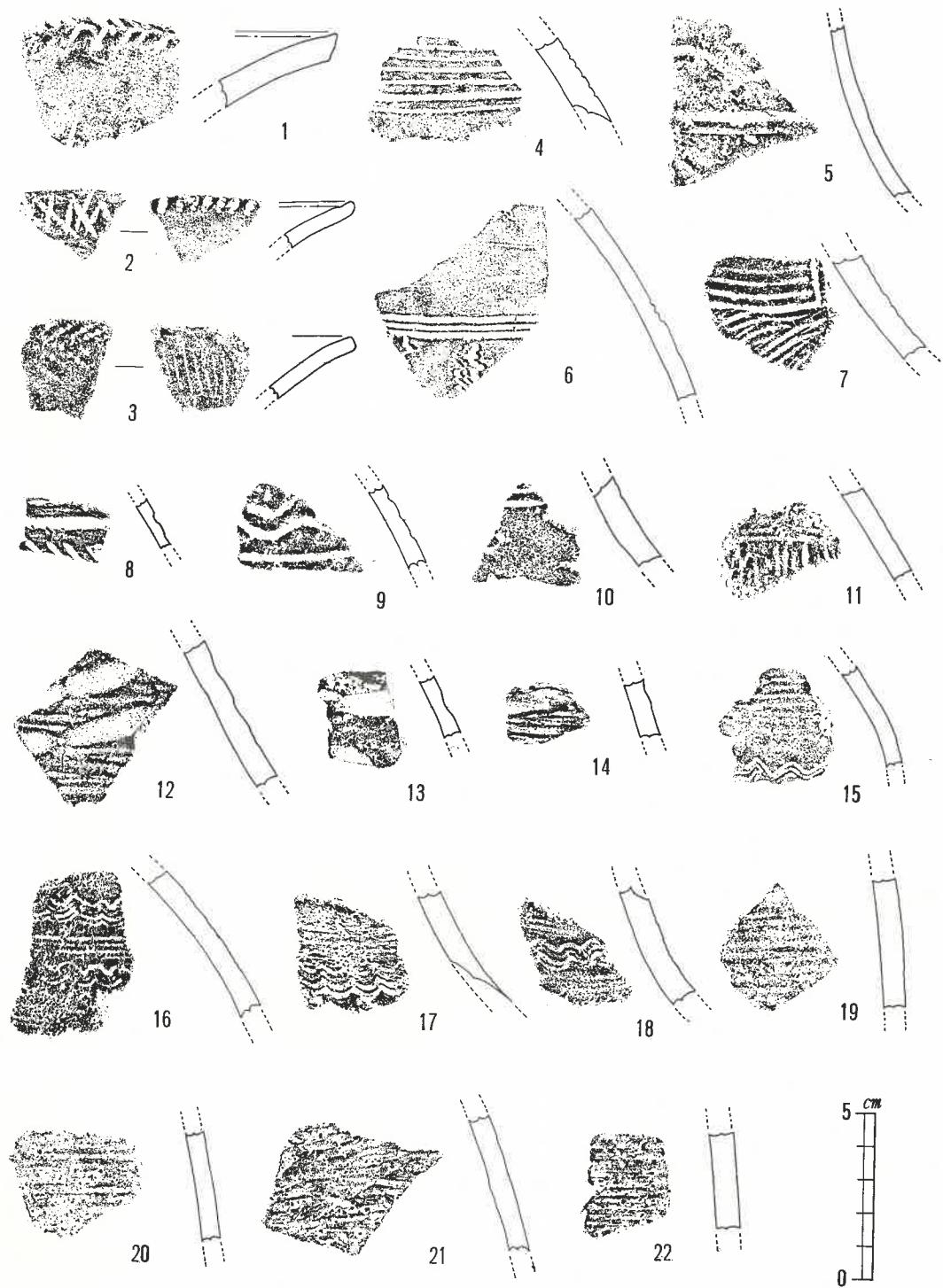
#### 第61トレンチ出土遺物（第18、19図、図版10、11）

##### 土 器（第18図、図版10）

次場下層a式、あるいは最下層式と呼ばれてきたもの、あるいはそれに近いものを紹介する。

いずれも小片である。

1、4、5、7～10は、沈線により施文されたものである。1は、綾杉文、4は、直線文を重ね、



第18図 第61トレンチ出土土器拓影

る。口径19.4cm、底径3.2cm、胴部最大径23.0cm、復元器高25.9cmを測る。胴部中位には、約5cmの幅で煤の付着が見られる。内面はナデ調整、外面はタタキ調整を施し、底部から胴部中位にかけてハケ調整を加える。良選された土で、焼成は良い。灰褐色を呈する。

畿内において「庄内式土器」とされる、布留遺跡山口池地点第III層<sup>⑤</sup>、藤原宮内裏東外郭S D527出土のものに近似する<sup>⑦</sup>。

最後に、以上の、出土遺物の概説をふまえて、最下層式、下層式、上層式として三つの文化期を示す、第61トレンチ、第5トレンチ、第21トレンチ出土土器の時期について考えたい。

第61トレンチ出土土器は、下層式土器より古相を示すものとして、抽出、紹介した。これらは、県内では、柴山出村遺跡をはじめ、新堀川<sup>⑨</sup>、上林<sup>⑩</sup>、下安原海岸<sup>⑪</sup>、高田<sup>⑫</sup>、米町川川底<sup>⑬</sup>の諸遺跡に類品を見るものであるが、いずれも断片的な資料であり、比較検討による位置づけを困難にしている。

櫛描文土器は、櫛歯数が少ない、あるいは、あさい、施文法が定まらない等の点で明らかに下層式のものに先行する。胎土も大きく異なる。

柴山出村では、条痕文あるいは沈線文を施した土器と櫛描文土器との共伴関係が不明とされている。ただ、過去二度にわたる調査では、同一層内で共存が認められており、施文法が粗い、櫛歯数が少ない、胎土に違いが認められないなどの点からも、共伴する可能性が大きいと考えたい。

本例は、柴山出村のものと、一部で併行する可能性をもつものであるが、現時点では、下層式以前のものとする他はない。

第5トレンチ溝状遺構出土土器は、器種構成のうえで、壺形土器、甕形土器が大きな割合を占める。

壺形土器2、12で見られる有段口縁は、橋本澄夫氏の指摘されるように、畿内第III様式古段階の影響をうけたものと考えられる。1、11、12で見られる、円形浮文や棒状浮文も同じ影響下にあるものと見られる。また、2のように、口縁部下端を山形につくるものは、柴山出村、高田の各遺跡で見られ、畿内では第II様式に出現する。7～9の「縦位櫛描文」も同じく第II様式に見られるものである。

9のように袋状口縁をもつものは尾張の貝田町式に一般化する形態で、伊勢湾沿岸地域から近江、山城にまで広がる。貝田町新式段階<sup>⑮</sup>で影響をうけていると考えられる。梯川遺跡出土品も同時期のものであろう。

櫛描文は、壺形土器にのみ施されており、体部に施されたものをすべて示したが、その全体に占める割合は少ない。7、8などは明らかに回転台を用いたものであるが、9のようにその使用が疑わしいものもある。

甕形土器は、器形的には、ほぼ統一されたものであり、口縁端部を波状につくるものが多い。<sup>⑯</sup>ただ、小松八日市遺跡で見られる、口縁部外端に刻み目を施すものはまれである。

5、9は、波状文と直線文、8では、直線文の下に斜位の沈線を連ねる。7では、草本茎類による調整も見られる。4の施文具は鋭い。いずれも精製の土器である。

11では、7で見られたものと同じく、草本の茎類による調整が見られる。粗製である。

2、3、6、15～18では櫛状具による施文が見られる。3の外面は2本を束とする細い工具で施文（あるいは調整）されている。6、16～18は、平行線文と波状文を組み合わせたものである。6の工具は鋭いが、他はいずれもあさい。16の波状文は安定しない。櫛歯数は、6が3本、3、16～18が4本、2が6本である。6のほかは、粗製である。

12～14、19～22は、条痕調整の見られるものである。12～14は、長楕円形の押し引き状文を加えている。いずれも粗製である。

#### 石 器（第19図、図版11）

23は、土壌内出土の大型蛤刃石斧である。片側面は欠損したもを再研磨している。

24は、拡張区出土の凹基無茎石鏃である。両面を加工するも、一部に自然面を残す。頁岩製である。

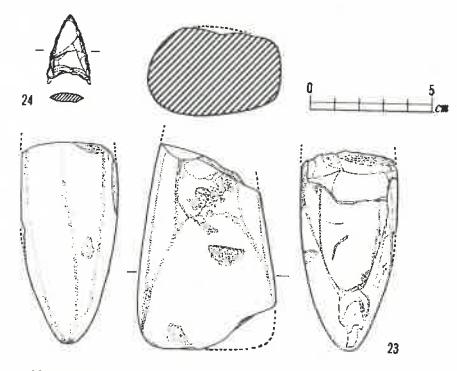
#### 第10トレンチ出土遺物（第20図、図版11）

土製紡錘車である。土器片を打ちかいたもので、周縁の研磨は粗い。下層式土器を伴っている。

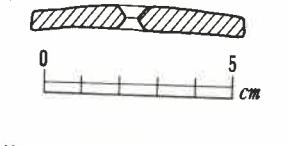
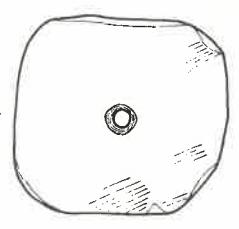
#### 第20トレンチ出土遺物（第21図、図版9）

黒色土層中より単独で出土した甕形土器である。

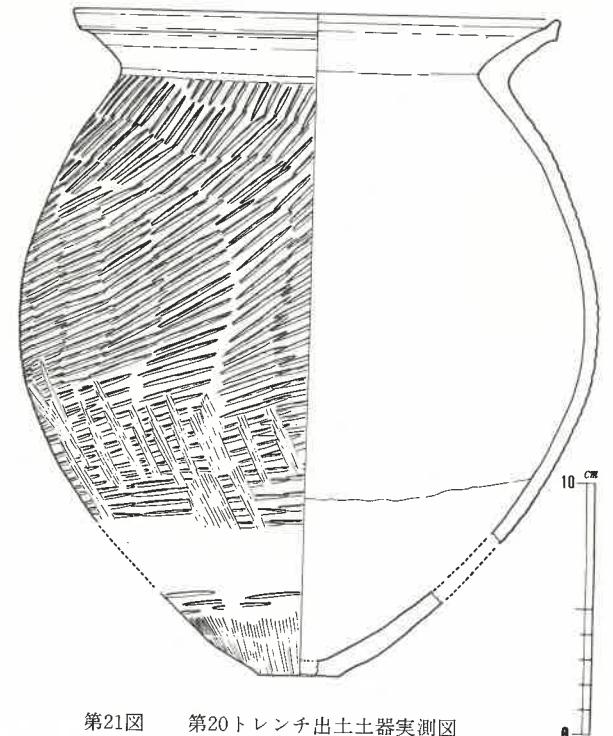
やや長手の体部をもち、胴部最大径を中位におく。底部は平底を保ってい



第19図 第61トレンチ出土石器実測図



第20図 第10トレンチ出土紡錘車実測図



第21図 第20トレンチ出土土器実測図

以上の所見から、本遺構出土土器は、主として畿内第III様式古段階の影響をうけつつ、一方では伊勢湾沿岸地方の要素も受容し、その器種構成を確立したものと考えることができる。当地方においては小松八日市遺跡との併行期をもちつつも、全体的にはやや先行するものと考えられる。<sup>①</sup>

第21トレンチ溝状遺構A出土土器は、器種構成、器体の特徴など、柳田うわの遺跡溝状遺構A出土土器に包括されるもので、弥生時代終末～古墳時代初頭のものと考えられる。

以上、大づかみに私見を述べたが、依然として多くの問題が残されている。それらについては、整理の完了と資料の増加をまって、改めて検討したい。

〈谷内尾晋司・三浦純夫〉

#### 注

- ① 伊東晃、柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集（1974）
- ② 木下忠「弥生時代の生活と社会、二、農具」『日本の考古学』III（1966）
- ③ 後藤守一編『伊豆山木遺跡』（1962）
- ④ 大場磐雄、小出義治他『千種』新潟県文化財報告書1（1953）
- ⑤ 置田雅昭「大和における古式土師器の実態」『古代文化』26-2（1974）
- ⑥ 安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60-2（1974）
- ⑦ 注⑤、⑥の文献で、「庄内式土器」とされた甕のなかでも、内面をナデ調整するものとヘラケズリ調整するものの二者が存在することが明らかにされている。前者は後後に先行すると考えられ、「庄内式土器」は二期間に分割しうるという意見を受容すれば、本例はそのうちでも古式のものとなろう。
- ⑧ 三森定男、藤岡謙二郎「加賀柴山潟畔の石器時代遺跡について」『考古学論叢』11（1939）、中口裕、上野与一他『柴山潟』（1957）
- ⑨ 中口、上野他前提書
- ⑩ 湯尻修平、塚野秀章「安養寺遺跡群（上林地区）調査報告」（1975）
- ⑪ 橋本澄夫、荒木繁行「金沢市下安原海岸遺跡の第1次調査」『石川考古学研究会会誌』18（1975）
- ⑫ 橋本澄夫「高田遺跡の調査概要」『富来町史』資料編（1974）
- ⑬ 橋本澄夫「北吉田米町川遺跡」『富来町史』資料編（1974）
- ⑭ 昭和13年と31年。報告は注⑧文献。
- ⑮ 吉岡康暢氏のご厚意で、第2次調査出土のものを、石川県立郷土資料館で実見。
- ⑯ 橋本澄夫「入門講座・弥生土器—中部北陸3—」『考古学ジャーナル』109（1975）
- ⑰ 京都府・深草遺跡で見られる。本遺跡では外面に施されるものもあり、櫛描文様の一種と考えたい。
- ⑱ 澄田正一他『朝日遺跡群第一次調査報告』（1975）
- ⑲ 浜岡賢太郎「北陸地方1」『弥生式土器集成』本編（1961）
- ⑳ 橋本澄夫「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」『石川考古学研究会会誌』11（1968）
- ㉑ 谷内尾晋司「柳田うわの遺跡」『羽咋市史』原始・古代編（1973）

#### 参考文献

- 橋本澄夫「次場遺跡」『羽咋市史』原始・古代編（1973）  
橋本澄夫「入門講座・弥生土器—中部北陸1～4」『考古学ジャーナル』106、107、109、111（1975）  
小林行雄、杉原莊介編『弥生式土器集成』本編（1961）  
小林行雄、杉原莊介編『弥生式土器集成』資料編（1958）

## 5まとめ

このたびの調査で、7～8月は畠地に28のトレンチ、9～10月は水田面に36トレンチ、グリッド、延面積約1443m<sup>2</sup>に及ぶ調査を行なった。

畠地北端部から北に30～50m地点で落込みがみられ、自然堤防、即ち集落遺跡の北限をたしかめることができた。東限は、ほぼ現次場部落の範囲と一致する。

畠地の南端部にみられた溝中から、次場下層式土器を含む豊富な資料が得られ、更にその南側の水田面に設定したグリッドから包含層がたしかめられたことから、南は、弦月状に南西に拡がる自然堤防のあったことが予想されると共に、須場神社を中心とする道路北側にだけあると考えてきたこれ迄の予想を裏切る、初期住居跡群の存在の可能性が出てきたのである。畠地から住居跡4、土壙もしくは貯蔵穴と思われるもの23、自然堤防上に縦横にほられた溝47条（内、弥生時代の溝19）がたしかめられ、予想以上に遺構の保存は良好であり、あらためて次場遺跡の重要性が確認されたのである。採取することは最小限度に留めたが、土器、石器、木器、木の実などの自然遺物の保存も極めてよい。

来年度に於て、南限をおさえて、次場遺跡の全容をつかむと共に、部落に近い北側に比べ開発の手ののびにくい南側だけでもウブな姿で後世に伝えなければならないと思う。

又、羽咋川をこえた西北部も、釜屋新保の砂丘内列に遺跡があることと共に、今後、都市計画道路の設定には充分な留意が払われねばならぬであろう。

〈浜岡 賢太郎〉



次場遺跡遠景（上中央が遺跡、右上は次場町 南から）



次場遺跡近景（左上の森は須場神社 西から）



同上（左は羽咋川 南から）

図版 3



第6トレンチ（北から）



第13トレンチ（西から）



第4トレンチ（西から）



第5トレンチ（東から）



第15トレンチ（東から）



第23トレンチ（南から）



第19トレンチ（東から）



第21トレンチ（西から）

図版 2

図版 5



第4 レンチ土壤A



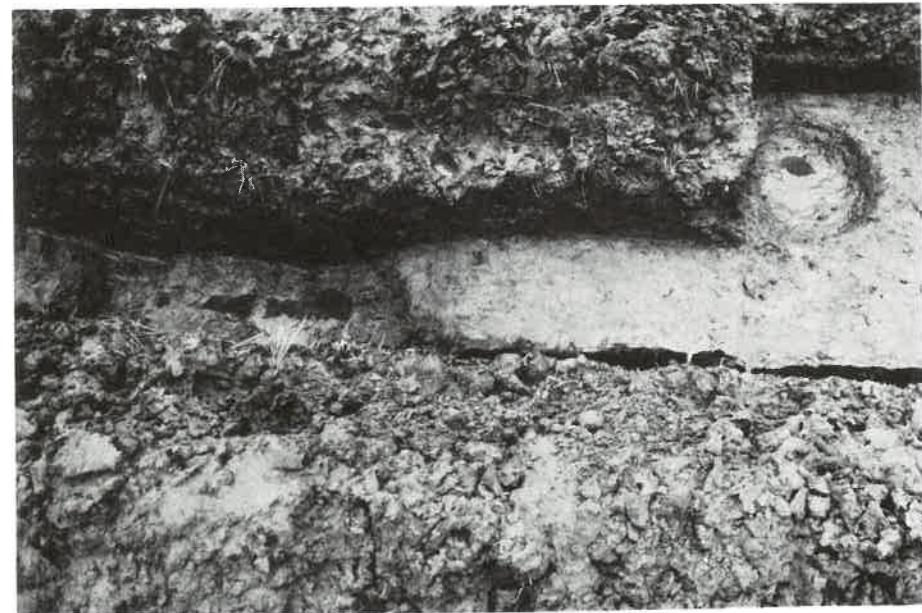
第5 レンチ土壤状遺構



第19 レンチ円形土壤



第21 レンチ構状遺構A



第61 レンチ（西から）



手前より第43、42、41 レンチ（北から）



第39 レンチ（南から）

図版 6

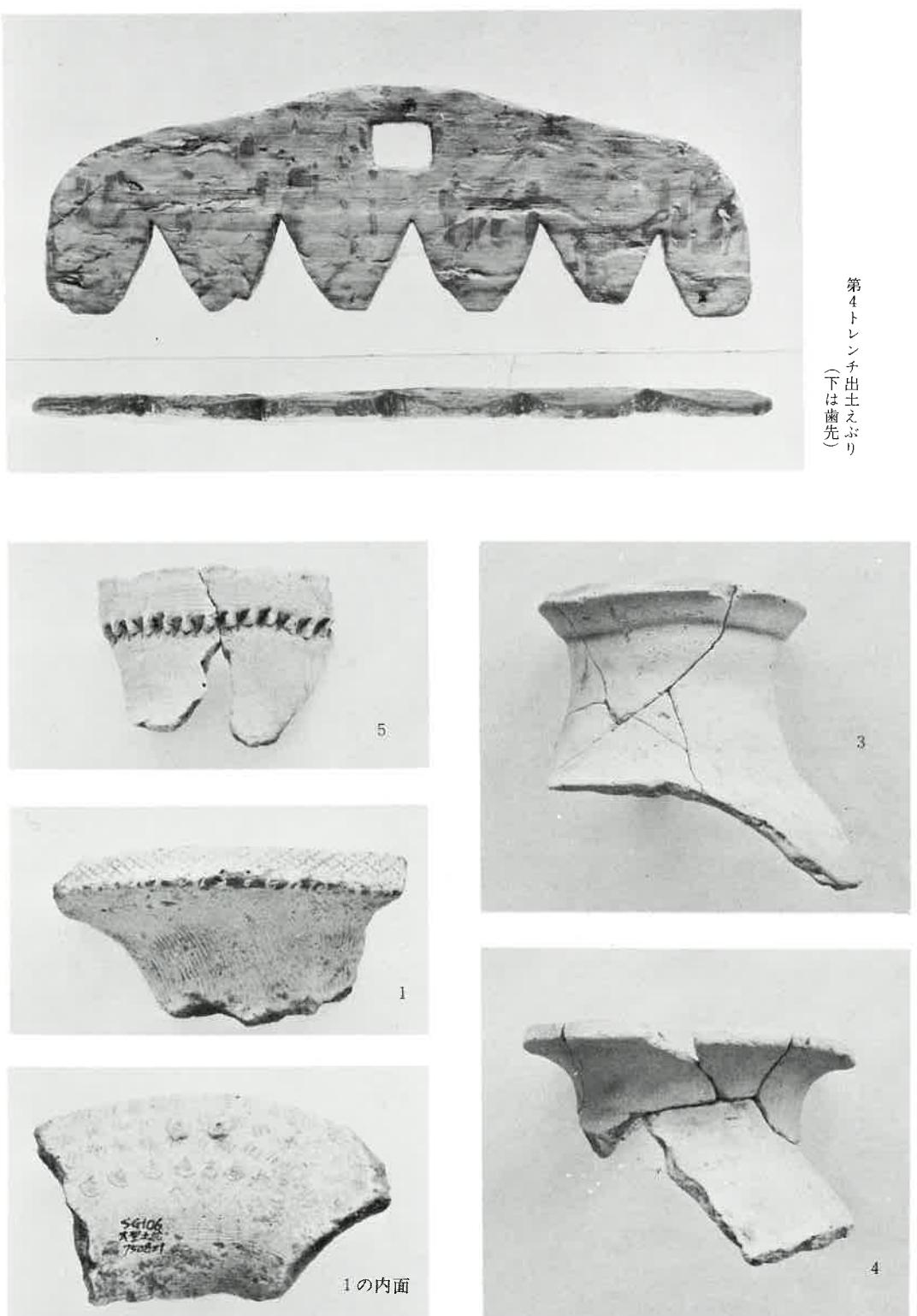


第10トレンチ鋳錠車出土状態



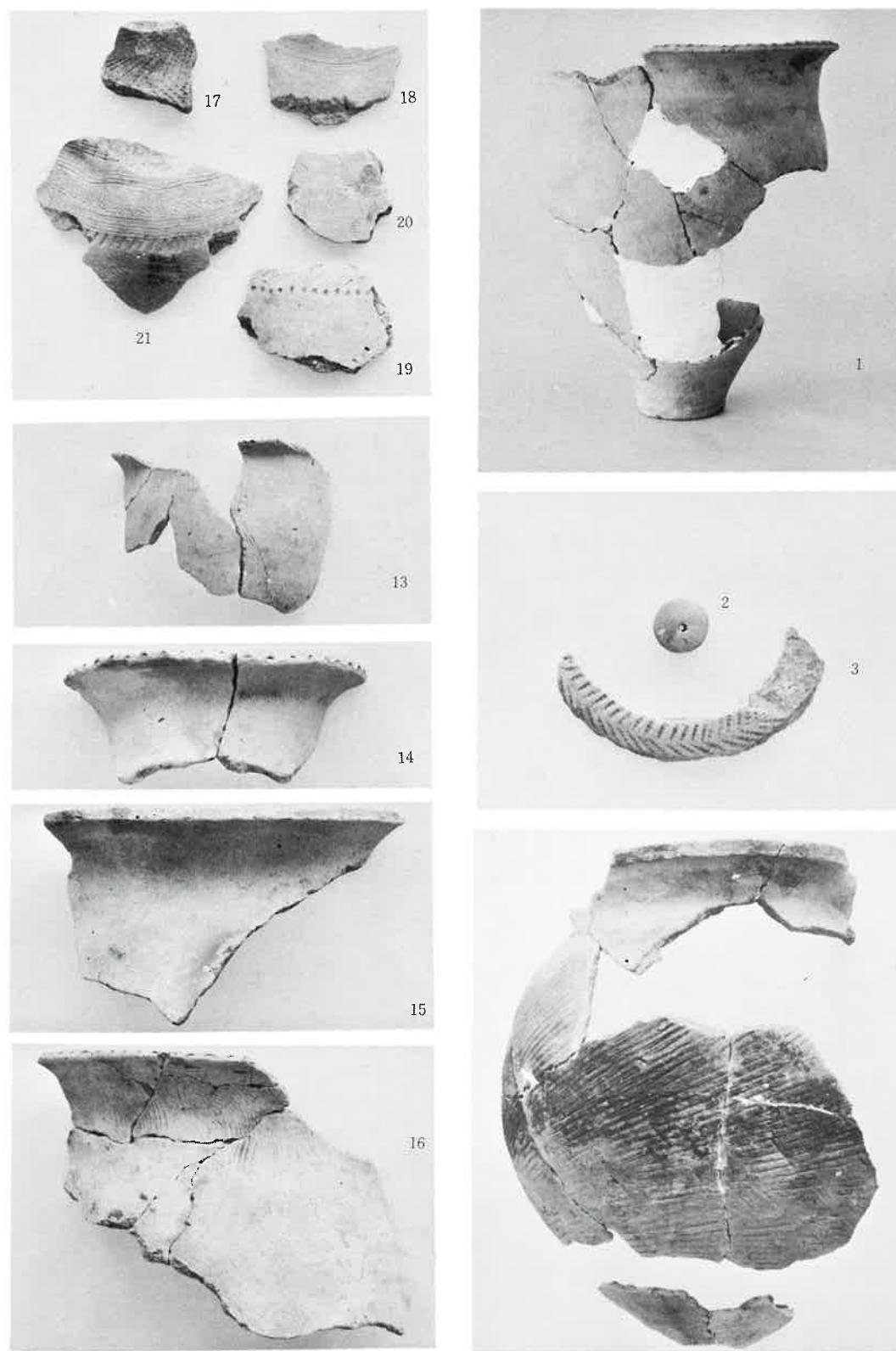
第36トレンチ土器包含状態

図版 7



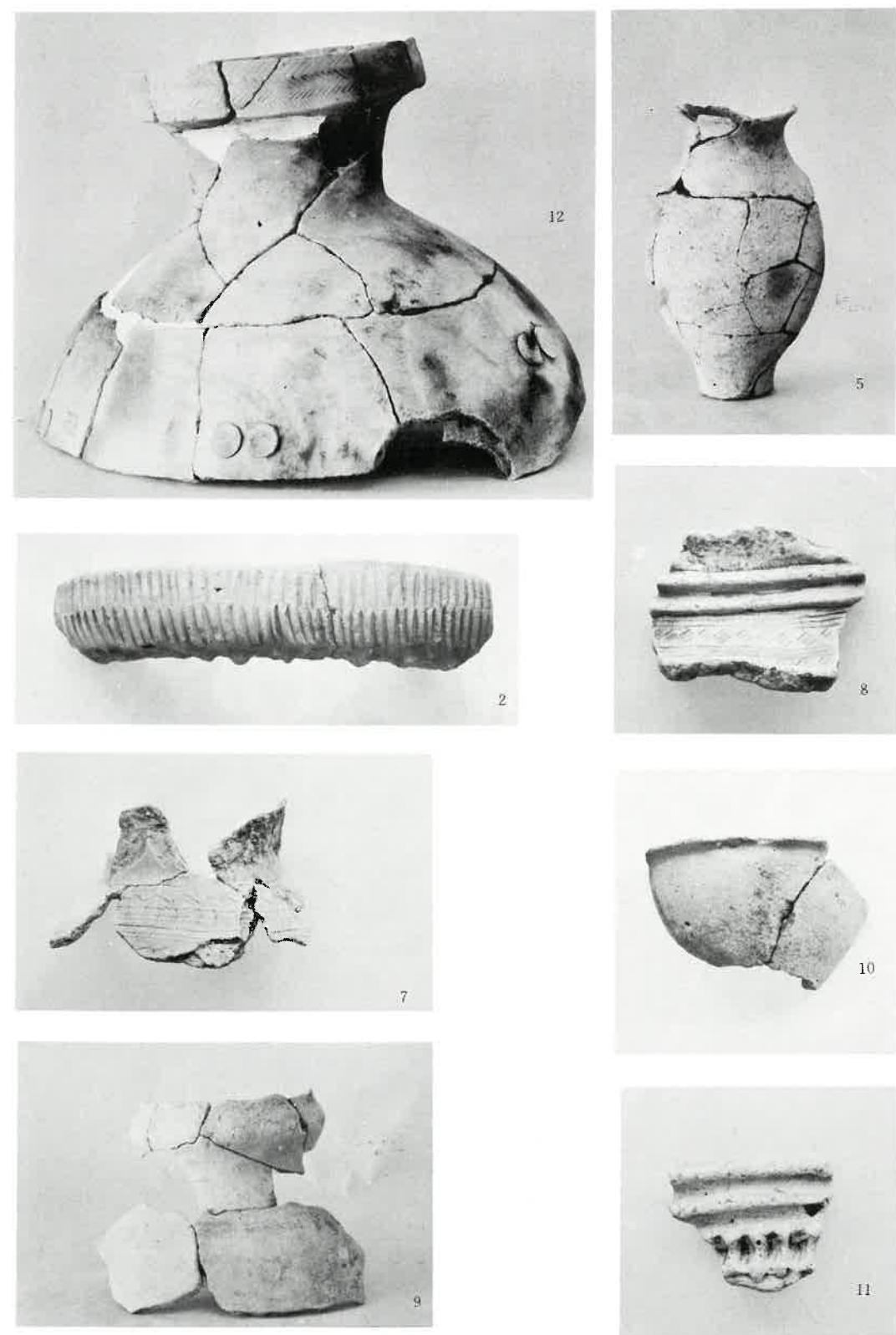
第5トレンチ出土土器

図版 9



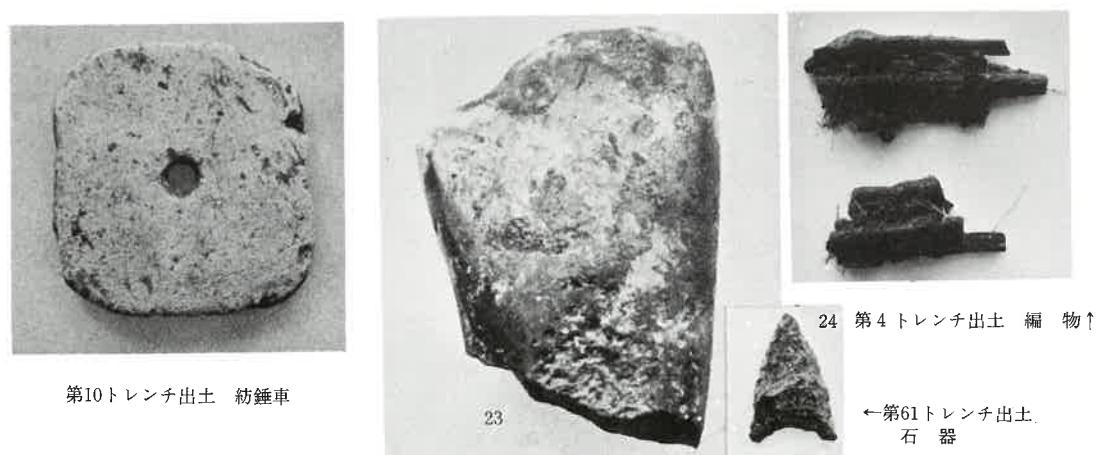
第5 (13~21)、19 (1~3)、20 (右下) ドレンチ出土遺物

図版 8



第5 ドレンチ出土土器

図版 11



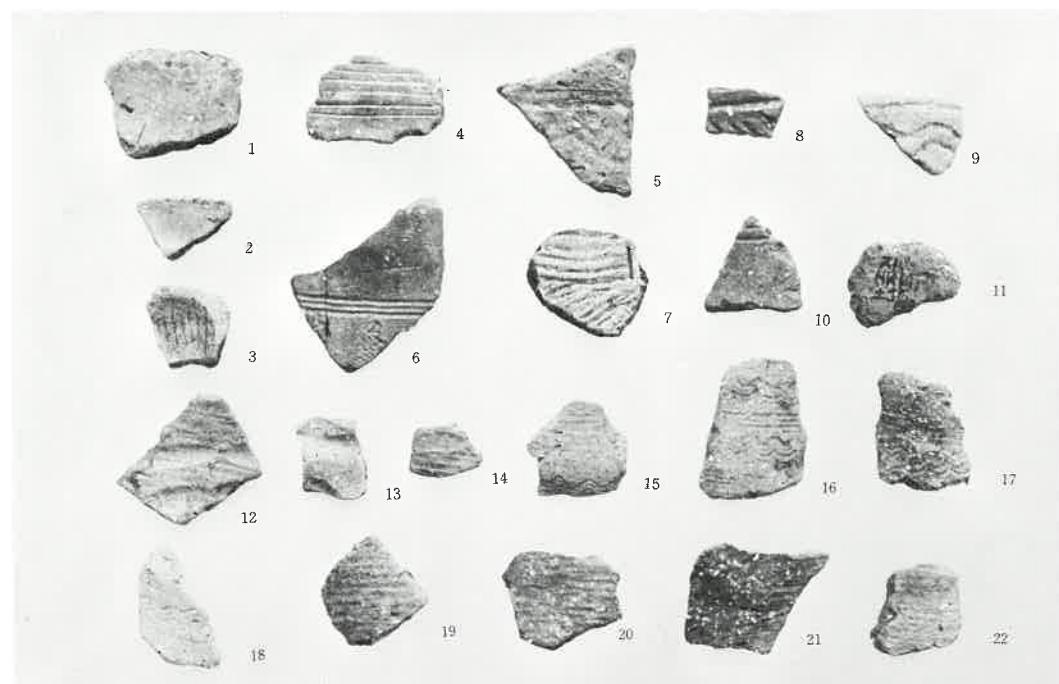
第10トレンチ出土 紡錘車



図版 10



第21トレンチ出土土器



第61トレンチ出土土器